

『浄土三部経大意』五本比較対照文

(金沢文庫蔵写真) 『浄土三部経大意』	(親鸞全書所収) 『三部経大意』	(元亨版・和語灯・写真) 『三部経釈』	(寛永版・和語灯) 『三部経釈』	(正徳版・和語灯) 『三部経釈』	註
<p>金沢函名寺</p> <p>雙卷経觀經阿弥陀經是ヲ浄土ノ三部経ト云</p> <p>雙卷経ニハ先阿弥陀仏ノ四十八願ヲ説キ次ニ願成就ヲ明せり</p>	<p>雙卷経觀經無量寿経阿弥陀經これを浄土の三部経といふなり。雙卷経にはまづ阿弥陀仏の四十八願をときつぎに願の成就をあかせり。</p>	<p>雙卷経觀經阿弥陀經これを浄土三部経といふ。雙卷経にはまづ阿弥陀仏の四十八願をとくのちに願成就をあかせり。</p>	<p>雙卷経觀經阿弥陀經是ヲ浄土ノ三部経ト云</p> <p>雙卷経ニハ先ツ阿弥陀仏ノ四十八願ヲ説キ後ニ願成就ヲ明せり</p>	<p>雙卷経觀經阿弥陀經これを浄土三部経といふ。雙卷経にはまづ阿弥陀仏の四十八願をとく、のちに願成就をあかせり。</p>	<p>①「其四十願」とは「其四十八願」の脱字か。</p>
<p>其四十願^①ト云ハ法藏比世自在王仏ノ御所ニシテ菩提心ヲ発シテ浄仏国土成就衆生ノ願ヲ立給へり</p>	<p>その四十八願といふは法藏比丘世自在王仏の御まへにして菩提心を</p>	<p>その四十八願といふは法藏比丘世自在王仏の御まへにして菩提心を</p>	<p>其四十願ト云フハ法藏比丘世自在王仏ノ御前ニシテ菩提心ヲ発シテ浄仏国土成就衆生ノ願ヲ建給フ。</p>	<p>その四十八願といふは法藏比丘世自在王仏の御まへにして、菩提心をこして、浄仏国土成就衆生の願をたて給ふ。</p>	<p>②写本には「無」を「无」と記す故に、特にこの字を記す。</p>
<p>凡ソ其ノ四十八願ハ或ハ无^③三惡趣トモ立テ不更惡トモ説キ或ハ悉皆金色トモ云ヒ无^④好醜トモ誓皆是彼国莊嚴往</p>	<p>おほよそその四十八願にあるいは無三惡趣ともたて、あるいは不更惡趣ともとき、あるいは悉皆金色ともいふは</p>	<p>おほよそその四十八願にあるいは無三惡趣ともたて、あるいは不更惡趣ともとき、あるいは悉皆金色ともいふは</p>	<p>凡ソ其ノ四十八願ニ或ハ無三惡趣トモ建テ、或ハ不更惡趣トモ説キ、或ハ悉皆金色トモ云フハ</p>	<p>その四十八願にあるひは無三惡趣ともたて、あるひは不更惡趣ともとき、あるひは悉皆金色ともいふは、</p>	<p>③「不更惡」は「不更惡趣」の「趣」の字脱か。</p>

生後ノ果報也此中ニ衆 生彼国ニ生スヘキ行ヲ 立給ヘル願ヲ第十八ノ 願トスルナリ	ふ、みなこれかの国の 莊嚴往生ののちの果報 なりこの中に衆生の彼 国にむまるべき行をた てたまへる願を第十八 の願とするなり	設我得仏十方衆生至心 信樂欲生我國乃至十念 若不生者不取正覺唯除 五逆誹謗正法ト云 凡四十八願ノ中ニ此願 殊ニ勝タリトス	設我得仏十方衆生至心 信樂欲生我國乃至十念 若不生者不取正覺唯除 五逆誹謗正法と云云 おほよそ四十八願の中 に、この願ことにすぐ れたりとす。	其故ハ彼国ニ若シ生ル、 衆生ナク□ハ悉皆色ノ 願モ無有好醜等ノ願モ 何ニヨリテカ成就セ ム、往生スル衆生ノア ルニツケテ身ノ色ロモ 金色、好醜アル事モナ	そのゆえは、かの国に まゝ衆生ならば悉皆 金色の願も、無有好醜 の願もなにゝよて成 就せむ。往生する衆生 のあるにつけてこそ、 身のいろも金色に、好	これ第十八の願のため なり。	設我得仏十方衆生至心 信樂欲生我國乃至十念 若不生者不取正覺 取正覺 といへるは四十八願のな かに此の願ことにすぐ れたりとす。	其故ハ彼国ニ若シ生ル 衆生無クハ、悉皆金 色無有好醜等ノ願モ何 ニ依テカ成就セム、往 生スル衆生ノ有ニ付テ コソ身ノ色モ金色ニ、 好醜有ル事モナク、五	みな第十八の願のため なり。	その第十八願といは 設我得仏十方衆生至心 信樂欲生我國乃至十念 若不生者不取正覺 といへり。四十八願の中 にこの願ことに勝たり とす。	④(元)〔寛〕〔正〕版と ④(金)〔親〕とは上の 横線の文が異なる。 〔元〕等の意による と四十八願中、第 十八願のために他 の四十七願が存在 するとの意のよう である。 〔金〕等は無三惡趣 等は浄土の果報と 考へ、浄土往生の 行は第十八願とす る。この欠文によ つて意味が異なる。 ⑤(金)〔親〕本には 「唯除五逆云云」の 文あるが、〔元〕 〔寛〕〔正〕版では略 されている。 ⑥(金)本と〔元〕版と では第十八願のと り扱い方が異なる。
--	---	---	---	--	--	-------------------	--	---	-------------------	---	--

ク五通ヲモエ、三十二相ヲモ具スヘシ。	醜あることもなく、五通おもえ、三十二相おも具すべけれ。	好醜ある事もなく、五通をも具し、宿命をもさとるへけれ	是ニ依テ善導釈シテ宣ハク、法蔵比丘四十八願ヲ立給テ一ノ願ニ皆ナ若我得仏十方衆生称我名号願生我国下至十念若不生者不取正覚ト云、四十八願ニ一々皆此心ロアリ	ある事もなく五通をも具し宿命をもさとるべけれ。	⑦「金」本では「三十二相ヲモ具スヘシ」とあるを元版寛版正版では「宿命をもさとる」とあり。
是ニヨリテ善導尺レテ言ハク、法蔵比丘四十八願ヲ立給テ一ノ願ニ皆ナ若我得仏十方衆生称我名号願生我国下至十念若不生者不取正覚ト云、四十八願ニ一々皆此心ロアリ	これによりて、善導釈してのたまはく、法蔵比丘四十八願をたてたまひて、一一の願にみな若我得仏十方衆生称我名号願生我国下至十念若不生者不取正覚と云云	これにて善導釈しての給はく、法蔵比丘四十八願をたて給ひて願願ヲタテ給ヒテ願々ニ皆若我得仏十方衆生称我名号願生我国下至十念若不生者不取正覚云云四十八願に一にみなこの心ありと釈し給へり。	取正覚云云四十八願に、一々ニ皆此心有ト釈シ給へり。	これにて善導釈しての給はく、法蔵比丘四十八願をたて給へるに、若我得仏十方衆生称我名号願生我国下至十念若不生者不取正覚と。四十八願に一一にみなこの意ありと釈し給へり。	⑧「善導」は「善導」のことか。 ⑨「若我得仏云云」の文には全て仮名をつけて訓読をほどこしているが、今は略す。 ⑩親鸞本には「願生我国」の文なし、「下至十声」の文あり。
凡諸仏願ト者上求井下化衆生ノ心ナリ、アル大乘経ニ云ク井ノ願ニ二種アリ、一ハ上求井ニハ下化衆生ノ意也、上求井ノ本意ハ衆生ヲ済度シヤスカラム為也ト云ヘリ、	おほよそ諸仏の願といふは、上求菩提下化衆生のころなり、ある大乘経にいはいく、菩薩はく、菩薩願有二三種一上求菩提二下化衆生ハ上求菩提ニハ下化衆生なり、その上求菩提の本意は衆生を済度しやすからむがためなりと云云	おほよそ諸仏の願といふは、上求菩提下化衆生の心なり、大乘経にいはいく、菩薩願有二三種一上求菩提二下化衆生ハ上求菩提ニハ下化衆生ノ心也、其の上求菩提の本意は衆生を済度しやすからむがためなりと云云	凡諸仏ノ願ト云ハ上求井下化衆生ノ心ナリ、大乘経ニ云ク菩薩はく、菩薩願有二三種一上求菩提二下化衆生ハ上求菩提ニハ下化衆生ノ心也、其の上求菩提の本意ハ衆生ヲ済度シヤスカラム為也ト云ヘリ、	をよそ諸仏の願といふは、上求菩提下化衆生の心なり、大乘経にいはいく、菩薩願有二三種一上求菩提二下化衆生ハ上求菩提ニハ下化衆生ノ心也、其の上求菩提の本意は衆生を済度しやすからむがためなりと云云	⑪親鸞本には「四十八願に云云」の文を欠く。 ⑫元亨版は「菩薩願云云」の文は全文振り仮名をつけているが、今は送り仮名のみを記して略す。 ⑬正徳版は「菩薩願云云」の文には全文振り仮名をつけているが、今は送り仮名のみ記す。

然ハ只タ本意下化衆生ノ願ニアリ、今弥陀如来国土莊嚴シ給シモ衆生ヲ引摂シヤスカムカ為也。	しかればたゞ本意下化衆生のこゝろにあり、いま弥陀如来の浄土を莊嚴したまひしも衆生を引摂しやすからむがためなり。	しかればたゞ本意は下化衆生の願にあり、いま弥陀如来の国土を成就し給にも衆生を引接せんがためなり。	然ハタ、本意ハ下化衆生ノ願ニ有リ、今マ弥陀如来ノ国土ヲ成就シ給フモ衆生ヲ引接センカ為也。	しかればたゞ本意は下化衆生の願にあり、いま弥陀如来の国土を成就し給ふも衆生を引接せんがためなり。	⑭「乙」字を脱字すか。
総テ何ノ仏モ成仏ノ後ハ内証外用ノ功德済度利生ノ誓願何レモ何レモ深クシテ勝劣アル事ナケレトモ、并ノ道ヲ行シ給ヒシ時ノ意巧方便ノ誓ヒハ皆是区ナル事也。	すべからくいづれの仏も成仏ののちは内証外用の功德済度利生の誓願いづれもふかくして勝劣あることなけれども行菩薩道の時の善巧方便のちかひ、みなこれまち／＼なり。	惣シテイツレノ仏モ成仏已後は内証外用の功德済度利生の誓願レモ／＼皆深クシテ勝劣有事ナケレトモ菩薩ノ道ヲ行シ給ヒシ時ノ善巧方便ノ誓ヒ皆ナ是レ区ナル事也。	惣シテイツレノ仏モ成仏已後は内証外用の功德済度利生の方便も成仏已後ハ内証外用の功德済度利生の方便も、菩薩の道を行し給ひし時の善巧方便のちかひはこれまち／＼なる事也。	⑮「金」本には「遙」と記すが区の誤写か。	⑮「金」本には「遙」と記すが区の誤写か。
弥陀如来ハ因位ノ時、専ラ我名ヲ念セム者ヲ迎ヘント誓給ヒテ兆載永劫ノ修行ヲ衆生ニ廻向シ給	弥陀如来は因位のとすき、もはら我名をとえむ衆生をむかへむとちかひたまひて、兆載永劫の修行を衆生に廻向したまふ。	弥陀如来は因位の時もはらわが名を念せん者ヲ迎ヘント誓ヒ給ヒ給ひて兆載永劫の修行を衆生に廻向し給ふ。	弥陀如来ハ因位ノ時、専ラ我ガ名ヲ念セシテ、兆載永劫ノ修行ヲ衆生ニ廻向シ給フ。	その中に弥陀如来ハ因位の時、もはらわが名を念せんものをむかへんとちかひ給ひて、兆載永劫の修行を衆生に廻向し給ふ。	⑯「親」本のみ「我名をとえむ衆生」とあり、他は「名号を念せん云々」とある。
濁世ノ我等カ依怙末代	濁世の我等が依怙生死	濁世のわれらか依怙末	濁世ノ我等カ依怙末代	濁世のわれらか依怙末	⑰「金」本のみ「衆生に廻向す」といふ、如來廻向の言は、選釈集等の法然の他の書には見られない。

ノ衆生ノ出離是ニアラ	ノ衆生ノ出離是ニ非ス	代ノ衆生ノ出離これに	代ノ衆生ノ出離これに
スハ何ニヲカ期セム、	ハ何ニヲカ期センヤ、	あらすはなにをか期せ	あらすはなにをか期せ
是ニヨリテ彼ノ仏ハ我	是ニ依テ彼仏モ我建超	んや、これにて、か	のほとけもみづから我
レ世ニ超タル願ヲ立ツ	世願トナノリ給ヘリ、	建超世願となのり給へ	り、三世の諸仏もいま
トナノリ給ヘリ、三世	三世ノ諸仏モ未タ如レ	は	は
ノ諸仏モイマ [㊤] 如 [㊤] 是	是ノ願ヲハ発シ給ハ	たかくのこときの願を	たかくのこときの願を
願ヲハ発シ給ハス、十	ス、十方ノ薩埵モイマ	はをこし給はず、十方	の薩埵もいまたこれら
方ノ薩埵 [㊤] モイマタ是	タ此等ノ願ハマシマサ	はをこし給はず、十方	の薩埵もいまたこれら
等誓 [㊤] ヒマシマサス、此	ズ、斯願若剋果セハ大	の願はまします、斯	の願はまします、斯
ノ願若剋果スヘクハ大	千 [㊤] 感動虚空ノ諸天人	願若剋果大千 [㊤] 感動虚	願若剋果大千 [㊤] 感動虚
千 [㊤] 感動スヘシ、虚空ノ	当雨珍妙華ト誓ヒ給ヒ	空諸天人当雨珍妙花と	ちかひしかは大地六種
諸天マサニ珍妙ノ花ヲ	シカハ、大地六種ニ震	動シ、天ヨリ華フリテ	に震動し、天より花ふ
雨スヘシト誓ヒ給シカ	汝正ニ正覺ヲ成リ給フ	りて、なんぢまさに正	覚なり給ふへしとつけ
ハ大地六種ニ振動シ天	ヘシト告ケタリキ	たりき。	たりき。
ヨリ花フリテ汝チマサ			
ニ正覺ヲナルヘシト告			
ケキ、			
法蔵比丘イマタニ成	法蔵比丘イマタ成仏シ	法蔵比丘いまた成仏し	法蔵比丘いまた成仏し
給ハストモ此願疑フヘ	給ハストモ此願疑フヘ	給はずとも、この願う	給はずとも、この願う
カラス、何況成仏已後	カラス、何況や成仏已	たがふへからず、いか	たがふへからず、いか
十劫ニナリ給ヘリ、信	後十劫ニ成リ給ヘリ。	にいはんや成仏已後十	にいはんや成仏已後十

㊤(正)版にはこの經文には音読みの振仮名をつける、今は略す。

㊤(元)版この經文には音読みの振仮名をつける、今は略す。

㊤(元)版には漢文に訓読みの振仮名をつけているが、今は略す。

<p>トモ往生ノ業ハ通シテ 皆一向専念無量寿仏ト 云リ、是則彼ノ仏ノ本 願ナルカ故也</p>	<p>其仏本願力聞名欲往生 皆悉到彼国自致不退転 ト云文アリ、漢朝ニ玄 通律師ト云者アリキ、 小乘戒ヲ持ツ者也、遠 行シテ野ニ宿シタリケ ルニ隣房二人アリテ此 文ヲ誦シキ、玄通是ヲ 聞テ一兩返誦シテ後ニ 思出事モナクシテ忘レ ニキ、其後コノ玄通律 師戒ヲ破テ其罪ニヨリ テ炎魔ノ庁ニイタル、 其時ニ炎魔王云ハク、 汝仏法流布ノ所ニ生タ リキ、所覺ノ法アラハ 速ニ説ヘシトテ高座ニ</p>	<p>へども、往生の業は通 じてみな一向専念無量 寿仏といへり、これす なわち、この仏の本願 なるかゆへなり、</p>	<p>其仏本願力聞名欲往生 皆悉到彼国自致不退転 といふ文あり、漢朝に 玄通律師といふものあ りき、小乗戒をたもつ ものなり、遠行して野 に宿したりけるに隣房 二人ありて此文を誦し き、玄通これをきゝて 一兩遍誦してのちにお もひいづることもなく してわすれにき、その うち玄通律師戒をやぶ りて、そのつみにより て閻魔の庁にいたる、 そのときに閻魔法王の のたまはく、なむち仏</p>	<p>其仏本願力聞名欲往生 皆悉到彼国自致不退転 といふ文あり、漢朝に 玄通律師といふものあ りき、小乗戒をたもて るものなり、遠行して 野寺に宿したりけるに 隣房に人ありてこの文 を誦す、玄通これをき ゝて一兩遍誦してのち おもひいたす事もなく てわすれにけり、その うちこの玄通律師戒を やふれり、そのつみに よて閻魔の庁にいたる 時、閻魔法王の給はく、 なんち仏法流布のとこ</p>	<p>其仏本願力聞名欲往生 皆悉到彼国自致不退転 ト云文アリ、漢朝ニ玄 通律師ト云者アリキ、 小乘戒ヲ持ツ者也、遠 行シテ野ニ宿シタリケ ルニ隣房二人アリテ此 文ヲ誦シキ、玄通是ヲ 聞テ一兩返誦シテ後ニ 思出事モナクシテ忘レ ニキ、其後此ノ玄通律 師だす事もなくてわす れにけり、そののちこの テ閻魔ノ庁ニ到時、閻 魔法王宣ク、汝仏法流 布ノ所ニ生レタリキ、 所覺ノ法アラハ速ニ説 魔法王の給はく、なん</p>	<p>いへとも、往生の業は 通じてみな一向専念無 量寿仏といへり、これ すなわちかのほとけの 本願なるかゆへ也。</p>	<p>また其仏本願力聞名 欲往生皆悉到彼国自 致不退転といふ文 あり。漢朝に玄通律師 といふものありき、小 乗戒をたもてるものな り、遠行て野寺に宿し たりけるに、隣房に人 ありてこの文を誦す、 玄通これをきゝて一兩 遍誦してのちおもひい だす事もなくてわすれ にけり、そののちこの テ閻魔ノ庁ニ到時、閻 魔法王宣ク、汝仏法流 布ノ所ニ生レタリキ、 所覺ノ法アラハ速ニ説 魔法王の給はく、なん</p>
--	---	---	---	--	---	--	--

〔金〕親本は、この文を如何に読んだかあきらかでない。
②上二本と下三本の願成就の次の文の文意異なる。棒線注意。

②〔寛〕版には返り点送り仮名あり。
③〔正〕版には全文振り仮名をつける、今は略す。

登セ給ヒシ時ニ、玄通	法流布のところにむま	ろにむまれたりき、所	クヘシトテ高坐ニ登セ	ち仏法流布のところに
高座ニ登テ思ヒマワス	れたりき、所学の法あ	学の法あらはすみやか	給ヒキ、其時玄通高座	むまれたりき、所学の
ニ惣シテ心ニ覺悟事無	らばすみやかにとくべ	にとくへしとて高座に	ニ登テ思ヒ廻スニ、都	法あらばすみやかにと
シ、昔シ野宿ニテ聞シ	しと、高座においのぼ	のほせ給ひき、その時	テ心ニ覺ル事ナシ、野	くへしとて高座にのほ
文アリキ、是ヲ誦テン	せられしとき、玄通高	玄通高座にのほりて、	寺ニ宿シテ聞シ文ア	せ給ひき、その時玄通
ト思ヒ出テ其仏本願力	座にのぼりておもひま	おもひめくらすにすへ	リ、是ヲ誦セント思ヒ	高座にのぼりておもひ
ト云文ヲ誦シタリシカ	わすに、すべてこころ	て心におほゆる事な	出テテ其仏本願力ト云	めくらすに、すへて心
ハ炎魔法王玉ノ冠ヲ傾	におぼゆることなし、	し、野寺に宿してき	フ文ヲ誦シタリシカ	におほゆる事なし、野
テ是ハ此西方極樂ノ弥	むかし野宿にてきし	し文あり、これを誦せ	ハ、閻魔法王珠冠ヲ	寺に宿してきし文あ
陀如来ノ功德ヲ説ク文	文ありき、これを誦し	んとおもひいてゝ其仏	傾テ、是ハコレ西方	り、これを誦せんとお
ナリトテ礼拝シ給ト云	てむとおもひいで、其	本願力といふ文を誦し	極樂ノ弥陀如来ノ功德	もひいでゝ其仏本願力
ヘリ、願力不思議ナル	仏本願力といふ文を誦	たりしかは閻魔法王た	ヲ説ク文ナリト云テ、	といふ文を誦したりし
事此文ニ見ヘタリ、	したりしかば閻魔王た	まのかふりをかたふけ	礼拝シ給ヒキ、願力不	かは、閻魔法王たまの
	まのかふりをかたふけ	てこれはこれ西方極樂	思議ナル事此文ニ見ヘ	かふりをかたふけて、
	て、これはこれ西方極	の弥陀如来の功德をと	タリ。	これはこれ西方極樂の
	樂の弥陀如来の功德を	く文なりといひて礼拝		弥陀如来の功德をとく
	とく文なりといひて礼	し給ひき、願力不思議		文なり、といひて礼拝
	拝したまふと云願力	なる事この文に見えた		し給ひき、願力不思議
	の不思議なること、こ	り。		なる事この文に見えた
	の文にみえたり、			り。
仏語弥勒其有得聞彼仏	仏語弥勒其有得聞彼仏	仏語弥勒其有得聞彼仏	仏語弥勒其有得聞	仏語ニ弥勒「其有得レ
名号歡喜踊躍乃至一念	名号歡喜踊躍乃至一念	名号信心歡喜乃至一念	彼仏名号信心歡喜乃至	聞ニ彼仏名号「信心歡

⑩元版に「名号信心歡喜」とある文は大經になし、特に「信心」の文なし、筆者の誤りか。

⑪(寛)版は全て返り点、送り仮名を付す、要点と思われるもののみ送り仮名を記す。また經文に「信心」の文あり。

<p>ニ遍ク光明ヲ照シテ一切衆生悉ク縁ヲ結ハシメンカタメニ光明無量ノ願ヲ立給ヘリ、第十二ノ願是也。</p>	<p>十方世界にあまねく光明をてらして、^③縁切衆生にことゝ縁をむすはしめんために、光明無量の願をたてたまへり。第十二の願これなり。</p>	<p>されて十方世界にあまねく光明をてらして一切衆生にことゝ縁をむすはしめんために、光明無量の願をたて給へり、第十二の願これなり。</p>	<p>アマネク光明ヲ照シテ一切衆生ニ悉ク縁ヲ結ハシメンカ為ニ光明無量ノ願ヲタテ給ヘリ、第十二ノ願是ナリ、</p>	<p>されて光明あまねく十方世界をてらして一切衆生にことゝ縁をむすはしめんがために光明無量の願をたて給へり、第十二の願これなり。</p>	<p>③ 正版では他の版と表現が異なる。 ④ 各本ともに第十二光明無量の願を撰衆生の願と解しているようである。 ⑤ 法然では撰法身の願は撰す。 これは法然、善導の考えと異なる、門下の異説と考えるべきか？</p>
<p>次ニ名号ヲ以テ因トシテ衆生ヲ引撰セムカ為ニ念仏往生ノ願ヲ立給ヘリ、第十八ノ願是也、</p>	<p>つぎに名号をもて因とし、衆生を引撰せむがために、念仏往生の願をたてたまへり、第十八願これなり。</p>	<p>名号をもて因として衆生を引接し給ふ事を</p>	<p>名号ヲ以テ因トシテ、衆生ヲ引接シ給フ事ヲ</p>	<p>又名号をもて因として衆生を引接し給ふ事を</p>	
<p>其ノ名号ヲ往生ノ因トシ給ヘル事ヲ一切衆生ニ遍ク聞カシメムカ為ニ諸仏称揚ノ願ヲ立給ヘリ、第十七ノ願是也、</p>	<p>その名を往生の因としたまへることを、一切衆生にあまねくかしめむがために、諸仏称揚の願をたてたまへり、第十七の願これなり、</p>	<p>一切衆生にあまねくかしめんかために</p>	<p>一切衆生ニアマネク聞カシメンカ為ニ</p>	<p>一切衆生にあまねくかしめむがために、</p>	<p>⑤ 第十七諸仏称揚の願は撰法身の願とされているが、名号を衆生に聞かしめる願(撰衆生願)と解す。称揚、咨嗟の意味の釈義異なる。 この釈義において(金)親(本)と(元)版とは出沒がある。この第十七願は聞名の願と解す。</p>
<p>我名ヲ称セスト云ハ、正覺ヲ不レ取云願ヲ立給ヘリ、</p>	<p>第十七の願に十方世界の無量の諸仏ことゝ咨嗟してわか名を称せすといは、正覺をとらじといふ願をたて給</p>	<p>第十七の願に十方世界の無量の諸仏ことゝ咨嗟してわか名を称せすといは、正覺をとらじといふ願をたて給</p>	<p>第十七ノ願ニ十方世界ノ無量ノ諸仏悉ク咨嗟シテ我名ヲ称セスト云ハ、正覺ヲ取ラシト云</p>	<p>第十七の願に十方世界の無量の諸仏ことゝ咨嗟してわか名を称せすといは、正覺をとらしと誓給ひて、</p>	

捨ノ益ヲ蒙ラム事不可疑フ、是故往生礼讃序云諸仏所証平等ニシテ一ツナレトモ若願行ヲ以テ来シ収ムレハ因縁無キニアラス、然モ弥陀世尊本深重誓願ヲ発シテ光明名号ヲ以テ十方ヲ摂化シ給ト云ヘリ。	合せは摂取不捨の益を事うたかふへからんこのゆへに往生礼讃の序にはく、諸仏所証平等は一若以願行来収来収非レ無 ^③ 因縁 ^④ 然弥陀世尊本発深重誓願ニ ^⑤ 摂化十方といへり。	不捨の益をかうふらんカラス、此故ニ往生礼讃ノ序ニ云ク、諸仏所証平等は一若以願行来収来収非レ無 ^③ 因縁 ^④ 然弥陀世尊本発深重誓願ニ ^⑤ 摂化十方といへり。	不捨の益をかうふからんことうたがふへからんこのゆへに往生礼讃の序にはく、諸仏所証平等は一若以願行来収来収非レ無 ^③ 因縁 ^④ 然弥陀世尊本発深重誓願ニ ^⑤ 摂化十方といへり。	又この願ひさしく衆生を済度せんがために、壽命無量の願をたて給へり、第十三の願これなり。	然ハ光明無量ノ願ハ横ニ十方衆生ヲ広ク摂取セムカ為也、壽命無量ノ願ハ豎ニ三世ヲ久ク
又此願久シテ衆生ヲ済度セムカ為ニ壽命無量ノ願ヲ立給ヘリ、第十三願是也、	又この願ひさしく衆生を済度せんがために、壽命無量の願をたて給へり、第十三の願これなり。	又この願ひさしく衆生を済度せんがために、壽命無量の願をたて給へり、第十三の願これなり。	又この願ひさしく衆生を済度せんがために、壽命無量の願をたて給へり、第十三の願これなり。	又この願ひさしく衆生を済度せんがために、壽命無量の願をたて給へり、第十三の願これなり。	然ハ光明無量ノ願ハ横ニ十方衆生ヲ広ク摂取セムカ為也、壽命無量ノ願ハ豎ニ三世ヲ久ク
又此願久シテ衆生ヲ済度セムカ為ニ壽命無量ノ願ヲ立給ヘリ、第十三願是也、	又この願ひさしく衆生を済度せんがために、壽命無量の願をたて給へり、第十三の願これなり。	又この願ひさしく衆生を済度せんがために、壽命無量の願をたて給へり、第十三の願これなり。	又この願ひさしく衆生を済度せんがために、壽命無量の願をたて給へり、第十三の願これなり。	又この願ひさしく衆生を済度せんがために、壽命無量の願をたて給へり、第十三の願これなり。	然ハ光明無量ノ願ハ横ニ十方衆生ヲ広ク摂取セムカ為也、壽命無量ノ願ハ豎ニ三世ヲ久ク
又此願久シテ衆生ヲ済度セムカ為ニ壽命無量ノ願ヲ立給ヘリ、第十三願是也、	又この願ひさしく衆生を済度せんがために、壽命無量の願をたて給へり、第十三の願これなり。	又この願ひさしく衆生を済度せんがために、壽命無量の願をたて給へり、第十三の願これなり。	又この願ひさしく衆生を済度せんがために、壽命無量の願をたて給へり、第十三の願これなり。	又この願ひさしく衆生を済度せんがために、壽命無量の願をたて給へり、第十三の願これなり。	然ハ光明無量ノ願ハ横ニ十方衆生ヲ広ク摂取セムカ為也、壽命無量ノ願ハ豎ニ三世ヲ久ク
又此願久シテ衆生ヲ済度セムカ為ニ壽命無量ノ願ヲ立給ヘリ、第十三願是也、	又この願ひさしく衆生を済度せんがために、壽命無量の願をたて給へり、第十三の願これなり。	又この願ひさしく衆生を済度せんがために、壽命無量の願をたて給へり、第十三の願これなり。	又この願ひさしく衆生を済度せんがために、壽命無量の願をたて給へり、第十三の願これなり。	又この願ひさしく衆生を済度せんがために、壽命無量の願をたて給へり、第十三の願これなり。	然ハ光明無量ノ願ハ横ニ十方衆生ヲ広ク摂取セムカ為也、壽命無量ノ願ハ豎ニ三世ヲ久ク

③ 光号因縁和合して摂取不捨の益(往生)を蒙ることを説く。

④ この説は選釈集等 法然の考えには見られない。門人の説か？

⑤ (元)版には全文具音読の振り仮名をつける。今は略す。

⑥ (寛)版には全文送り仮名が付されているが今は略す。

⑦ (正)版は全文振仮名を付すが、今は略す。

利益セムカ爲也、如此 因縁和合スレハ撰取 不捨ノ光明常ニ照シ テ捨給ス。	方世界をひきしく利益 せむかためなり。かく のごとく因縁和合すれ ば撰取不捨の光明つね にてらしてすてたまは ず。	に十方世界をひきしく 利益せんかためなり、 かくのごとく因縁和 合すれば撰取の光明の 二、	世界ヲ久ク利益センカ に十方世界をひきしく 爲也、如是ノ因縁和合 スレハ撰取ノ光明ノ中 に、
此光明ニ又化仏 ^(音) ヲマ シテコノ人ヲ撰護 シテ百重千重囲繞シ給 ニ信心弥ヨ増長シ衆苦 悉消滅ス臨終ノ時ハ仏 自来テ迎ヘ給ニ諸ノ邪 業繋ヨク導ル者ノナ シ、是ハ衆生ノ命終ル 時ニ臨テ百苦来リ迫テ 身心ヤスキ事ナク惡縁 外ニヒキ妄念内ニモヨ ヲシテ境界自體当生ノ 三種ノ愛心キライ起 リ、第六天ノ魔王此時 ニ当リテ威勢ヲ起テ妨 ヲナス	この光明にまた化仏菩 薩ましゝて、この人 を撰護して百重千重 を撰護して百重千重 に信心いよいよ増長 し衆苦ことゝく消滅 す、臨終の時ハ仏自 来迎シ給ふに、もろ ゝの邪業繋よくさふ るものなし、これは 衆生いのちおはる時 にのぞみて、百苦きた りせめて、身心やす き縁はかにひき妄念 うちにもよをして境 界自体第六天ノ魔王 此時ニ當リテ威勢 ヲ起シテ以テ妨ヲ ナス	又化仏菩薩ましまして 此人ヲ撰護シテ百重 千重囲繞シ給ふに、 信心イヨイヨ増長シ 衆苦悉ク消滅ス、臨 終ノ時ハ仏自来迎シ 給フニ、諸ノ邪業繋 能ク導ル者ナシ、 是ハ衆生ノ命終ル時 ニ望ミテ百苦来リ迫 メ身心安キ事ナク、 惡縁外ニ引キ、妄念 内ニ百苦きたりせ めて身心やすき事 なく、惡縁はかに ひき、妄念うちに もよをして境界自 体當生ノ三種ノ愛 心をひ	又化仏菩薩ましまし て、この人を常に撰 護して百重千重に 囲繞し給ふに、信心 いよいよ増長し、衆 苦ことゝく消滅す、 又臨終の時ほとけ みづから来迎し給 ふに、もろゝの邪 業繋よくさふるもの なし、これは衆生 いのちおはる時に のぞみて、百苦きた りせめて身心やす き縁はかにひき、 妄念うちに

<p>生の三種の愛心きおひ おこりて第六天の魔王 もこの時にあたりて威 勢をおこしてさまたげ をなす、</p>	<p>王この時にあたりて威 勢をおこしてもてさま たけをなす。</p>	<p>おこる、第六天の魔王 この時にあたりて威勢 をおこしてもてさまた げをなす。</p>	<p>如レ此種々ノ礙ヲ除カ 為ニシカシ臨終ノ時ニ ミツカラ 井聖衆圍繞 シテ其人ノ前ニ現セム ト云フ願ヲ建テ給ヘ リ、第十九ノ願是也、是 ニヨリテ臨終ノ時ニイ タレハ仏来迎シ給フ、 行者是ヲ見テ心ニ歡喜 ヲナシテ禪定ニ入カ如 クニシテ忽ニ觀音ノ蓮 台ニ乗リテ安養ノ宝刹 ニ至ルナリ、此等ノ益 アルカ故ニ念仏衆生撰 取不捨ト云ヘリ。</p>	<p>かくのごときの種々の さはりをのぞかむがた めに、しかも臨終の時 にはみづから菩薩聖衆 と囲繞して、その人の 衆に囲繞せられて、そ まへに現せむといふ願 をたてたまへり、第十 九の願これなり、これ によりて臨終のときに いたりぬれば仏来迎し とけ来迎し給ふ行者こ れを見たてまつりて、 心に歡喜をなして禪定 に在るかごとくして、 たちまちに觀音の蓮台 に乗して安養の宝池に いたる也、これらの益 あるかゆえに念仏衆生</p>	<p>かくのごときの種々の さはりをのぞかんかた めに、かならず臨終の 時にはみづから菩薩聖 衆に囲繞せられて、そ の人のまへに現せんと り。第十九ノ願是也、 是ニ依テ臨終ノ時至レ ハ仏来迎シ給フ、行者 此ヲ見奉リテ心ニ歡喜 ヲナシテ禪定ニ入カ如 クシテ頓ニ觀音ノ蓮台 ニ坐シテ安養ノ宝池ニ 到ル也、此等ノ益アル カ故ニ念仏衆生撰取不 捨ト云也。</p>	<p>如レ是ノ種々ノ障リヲ 除カンカ為ニ必臨終ノ 時ニハ自ラ菩薩聖衆ニ 圍繞セラレテ其人ノ前 時にはみづから菩薩聖 衆に囲繞せられて、そ の人のまへに現せんと ちかひ給へり、第十九 の願これ也、これによ りて臨終の時にいたれ ば、ほとけ来迎し給ふ。 行者これを見たてまつ りて、心に歡喜をなし て、禪定に在るかごと くして、たちまちに觀 音の蓮台に乗して安養 の宝地にいたる也、こ れらの益あるがゆへに</p>	<p>かくのごときの種々の さわりをのぞかんがた めに、かならず臨終の 時にはみづから菩薩聖 衆に囲繞せられて、そ の人のまへに現せんと ちかひ給へり、第十九 の願これ也、これによ りて臨終の時にいたれ ば、ほとけ来迎し給ふ。 行者これを見たてまつ りて、心に歡喜をなし て、禪定に在るかごと くして、たちまちに觀 音の蓮台に乗して安養 の宝地にいたる也、こ れらの益あるがゆへに</p>
---	---	---	---	---	---	---	--

<p>抑又此經ニ具三心者必 生彼國ト説ケリ、一ハ 至誠心ニ深心三廻向発 願心也三心ハ区ニ分レ タリト云ヘトモ要ヲ取 リ詮ヲ撰テ是ヲイヘハ 深心一ニ□ヲサマレリ</p>	<p>善導和尚釈テ言ハク至 ト者真□誠ト者実也、 一切衆生身口意業ニ修 ル所ノ解行必真実□心 ノ中ニ作スヘキ事ヲア カサントス、外ニ賢善 精進ノ相ヲ現シテ内ニ 虚仮ヲ懷コトエサレ</p>
<p>に念仏衆生撰取不捨と いへり。</p>	<p>善導和尚釈しのためは く、至といふは真なり、 誠といふは実なり、一 切衆生の身口意業に修 するところの解行、か ならず真実心の中にな すべきことをあかさむ とす、ほかに賢善精進 の相を現じ、うちには 虚仮をいなくことをえ</p>
<p>撰不捨といふなり。</p>	<p>善導和尚釈し給はく、 至といふは真なり、誠と いは実なり、一切衆生 の身口意業に修すると ころの解行、かならず 真実心のなかになすへ き事をあかさんとす、 ほかに賢善精進の相を 現してうちに虚仮をい なく事をえざれ</p>
<p>又此經ニ具三心者必生 彼國ト説ケリ、三心ト 云ハ一ニハ至誠心、二 ニハ深心、三ニハ廻向 発願心也、三心ハ区ニ 分レタリト云ヘトモ、 要ヲ取リ詮ヲ撰テ是ヲ 云ハ深心ニ収メタリ。</p>	<p>善導和尚釈シ給ハク、 至ト云ハ真ナリ、誠ト 云ハ実ナリ、一切衆生 ノ身口意業ニ修スル所 ノ解行、必ス真実心ノ 中ニナスヘキ事ヲ明シ トス、外カニ賢善精進 ノ相ヲ現シテ内ニ虚仮 ヲ懷ク事ヲ得サレ</p>
<p>念仏衆生撰取不捨とい ふなり。</p>	<p>善導和尚釈しての給は く、至といふは真なり、 誠といふは実なり、一 切衆生の身口意業に修 するところの解行、かな らず真実心の中になす べき事をあかさんと す、ほかに賢善精進の 相を現して、うちに虚 仮をいなく事をえざれ</p>

され、

貪瞋邪偽奸詐百端ニシ
テ惡性侵シカタク、事
蛇蝎ニ同、雖^モ起^ト三業^ヲ
名^ヲ為^ス雜毒^ノ善^ニ亦虛假^ケノ
行トナツク眞実ノ業ト
ナツケサルナリ、若如^シ
此安心起行ヲ作ス者ハ
タトヒネムコロニ身心
ヲハケマシテ日夜十二
時ニ急ニ走り急ニ作テ
灸^ニ頭燃^ニコトクニスル
モノハモロ^クニ雜毒
ノ善ト名ク、此雜毒ノ
行ヲ廻シテ彼ノ仏ノ淨
土ニ生ル、事ヲ求メム
ト欲スルモノハコレ必
ス不可ナリ、何以テノ
故ニ、正ク彼阿弥陀
仏因中ニ并^ニ行^ヲ行
シ給シ時キ乃至一念モ
一刹那モ三業ニ所修皆
是眞実心中ニ作ニヨリ

テナリ、凡所^④施趣^⑤求
 ルカ為ニ亦^⑥皆真実ナ
 リ、又真実ニ二種有リ、
 一者自利真実二者利他
 真実ナリ、自利真実ト
 者復二種アリ、一者真
 実心ノ中ニ自他ノ諸惡
 及穢因等ヲ制捨シテ一
 切ノ^⑦并ト同ク諸惡ヲ
 捨テ諸善ヲ修シ真実心
 ノ中^⑧ニナスヘシト云
 ヘリ、此外多クノ尺有
 リ、頗フル我等カ分ニ
 コエタリ、但此至誠心
 ハヒロク定善ト散善ト
 弘願トノ三門ニワタリ
 テ釈セリ、是ニツキテ
 惣別ノ義アルヘシ、惣
 者自力ヲ^⑨以テ定散等
 ヲ修シテ往生ヲ願フ至
 誠心也、別者他力ニ乘
 テ往生ヲ願スル至誠心

④「凡所施為趣求」の
 文は選択集の読み
 と異なる。

⑤「諸惡ヲ捨テ諸善
 ヲ修シ、真実心ノ
 中ニナスベシト云
 ヘリ」の文は善導
 の釈にはなし。

⑥經を定善、散善、
 弘願の三に区分
 す。

⑦至誠心の惣別二釈
 を説く。

也、其故ハ□ノ疏ノ玄
 義分ノ序題ノ下タニ云
 ク、定即慮ヲヤメテ以
 テ心ヲコラシ、散ハ即
 惡ヲ廢シテ以テ善ヲ修
 ス、此ノ二善ヲ廻シテ
 往生ヲ求也、弘願者大
 經ニ説カ如シ、一切ノ
 善惡ノ凡夫生ル、事ヲ
 得ハ皆阿弥陀仏ノ大願
 業力ニ乗シテ増上縁ト
 セスト云フ事ナシトイ
 ヘリ、自力ヲ廻シテ他
 力ニ乗ル事ハ明ナルモ
 ノカ、
 シカレハ初二一切衆生
 ノ身口意業ニ修ル所ノ
 解行必真実心ノ中ニ
 ナスヘシ、外ニ賢善精
 進ノ相ヲ現シテ内ニ
 虚仮ヲ懷ク事エサレ
 ト云ヘル其□解行ト者
 罪惡生死ノ凡夫弥陀ノ

といへる、その解行と
 いふは罪惡生死の凡

といえり、この解行と
 いは罪惡生死の凡夫、

ト云ヘリ、其ノ解行ト
 云ハ罪惡生死ノ凡夫、

といへり、その解行と
 いは罪惡生死の凡夫、

<p>本願ニ乗シテ十声一声 ニ決定シテ生ルヘシト 真実ニサトリテ行スル 是也、</p> <p>外ニハ本願ヲ信スル相 ヲ現シテ内ニハ疑心ヲ 懷ク是ハ不真実ノ心也 虚仮ノ心也、次外ニ賢 善精進相ヲ現シテ内ニ ハ懈怠ナル是ハ不真実 ノ行也、虚仮ノ行也、</p>	<p>夫、弥陀の本願により て十声一声決定してむ まると真実にさとりて 行ずる、これなり。</p> <p>ほかに本願を信する 相を現して、うちには 疑心をいだく、これは 不真実の心なり、ほ かに精進の相を現じ てうちには懈怠なるこ れ不真実の行なり。虚 仮の行なり。貪瞋邪偽 奸詐百端にして悪性や めかたし、事蛇蝎にお なじ、三業をおこすと いえども、なづけて難 毒の善とす、また虚仮 の行となづく、真実の 業となづけず、もしか くのごとく安心起行を なすものはたとひ身心 を苦勵して、日夜十二 時に急走急作して頭燃</p>	<p>弥陀の本願によて十声 一声決定してむまると 真実にさとりて行する これなり。</p> <p>ほかに本願を信する 相を現し、うちには疑 心をいたく、これは不 真実の心なり。</p>	<p>弥陀ノ本願ニ依テ十声 一声決定シテ生ルト真 実ニサトリテ行スル是 ナリ。</p> <p>外ニハ本願ヲ信スル相 ヲ現シ、内ニハ疑心ヲ 懷ク、是ハ不真実ノ心 也</p>	<p>弥陀の本願によて、十 声一声決定してむまる と真実に解<small>さとり</small>て行するこ れなり。</p> <p>ほかに本願を信する 相を現し、うちには疑 心をいだく、これは不 真実の心なり。</p>
---	--	--	---	---

をはらふがごとくする
ものはおほく雑毒の善
となづく、この雑毒の
善をめぐらして、かの
仏の淨土にむまれむと
もとめむものは、これ
かならず不可なり。な
にをもてのゆへに、彼
阿弥陀仏の因中に菩薩
の行を行じたまひし
時、乃至一念一刹那も
三業に修するところみ
なこれ真実心の中にな
す。おほよそ施為趣求
するところ、またみな
真実なるによる。又真
実に二種あり、一には
自利真実、二には利他
真実なり、真実に自他
の諸悪及穢国等を制捨
して、一切菩薩とおな
じく諸悪をすて諸善を
修し、真実の中になす

④「施為趣求」の読み
方は〔金〕本と異な
り、〔元〕版と同じ
読みをする。

べしといへり、このほかおほくの釈あり、すこぶるわれらが分にこえたり、

たゞし、この至誠心はひろく定善、教善、弘願の三門にわたりて釈せり、これにつきて惣別の義あるべし、惣といふは自力をもて定散等を修して往生をねがふ至誠心なり、別といふは他力に乗じて往生をねがふ至誠心なり、そのゆへは、疏の玄義分の序題の下にはく定はすなわちおもひをとめて、ここをこらし、散はすなわち悪をとめて善を修す、この二善をめぐらして往生をもとむるなり、弘願といふは、大經にとく

がごとし、一切善惡の凡夫むまるゝことをうるは、みな阿弥陀仏の大願業力に乗して増上縁とせずといふことなしといへり、自力をめぐらして他力に乗ずることあきらかなるものか、しかればはじめに一切衆生の身口意業に修するところの解行、かならず真実心の中になすべし、外に賢善精進の相を現ずることをえざれ、うちに虚仮をいだければなり、その解行といふは罪惡生死の凡夫弥陀の本願に乗じて十声一声決定してむまるべしと真実心に信ずへしとなり、外には本願を信ずる相を現じて内には疑心を懷、

④〔親〕本のこの読み方は親鸞「教行信証」の読み方と同じ。しかし、前文に出る同文は選択集と同じ読み方をしている。

<p>貪瞋邪偽奸詐百端ニシテ惡性[□]カシカタシ事蛇蝎ニ同シ、雖起^モ三業^ヲ名雜毒^善、又虛假行名^ト眞実^ト善^ト不^レ名云ヘリ、自他ノ諸惡ヲステ三界六道ヲ毀厭シテ皆ナスヘカラク眞実ナルヘシ、故ニ至誠心ト名クト云ハ是惣義也、</p>	<p>故如何ト者深心ノ下ニ罪惡生死ノ凡夫駄劫ヨリ以來出離ノ縁アル事ナシト信スヘシト云ヘリ、若此ノ積ノ如ク一切ノ菩薩ト同ク諸惡ヲステ行住坐臥ニ眞実ヲ</p>
<p>これは不眞実の心なり。 次に貪瞋邪偽奸詐百端にして惡性やめがたし、事蛇蝎におなじ、三業をおこすといへども、なづけて雜毒の善とす、また虚假の行となづく、眞実の善となづけずといふなり、自他の諸惡をすて三界六道毀厭して、みな専ら眞実なるべし、かるがゆへに至誠心となづくといふ。これらは總の義なり。</p>	<p>ゆへはいかむとなれば、深心の下に罪惡生死の凡夫駄劫よりこのかた出離の縁あることなしと信ずへしといへり、もしかの積の如く、一切菩薩とおなじく諸</p>

④ 自他の諸惡を捨て、三界六道を毀厭する眞実の心を總の至誠心という。即ち止惡厭離心の眞実の面を總の至誠心という。

モチイハ悪人ニアラス、煩惱ヲハナレタル物ナルヘシ、彼ノ分段生死ハナレ初果証シタル聖者、ナラ貪瞋痴等ノ三毒ヲ起ス何況一分ノ惑ヲモ断サラム罪惡生死ノ凡夫イカニシテカ此眞実心ヲ具スヘキヤ ^㉔	惡をすて行住坐臥に眞実をもちゐるは悪人にあらず、煩惱をはなれたるものなるべし、 ^㉕ かれは(金)(親)本の特色か？
此故ニ自力ニテ諸行ヲ修テ至誠心ヲ具セムトスルモノハ専ラカタシ千カ中ニ一人モナシト云ヘル是也、スヘテ此三心ハ念仏及諸行ニワタリテ釈セリ、文ノ前後ニヨリテ心得ワカツヘシ。	惡をすて行住坐臥に眞実をもちゐるは悪人にあらず、煩惱をはなれたるものなるべし、 ^㉕ かれは(金)(親)本の特色か？
例ハ四修ノ中ノ無間修	例せば四修の中の無間

㉔ 凡夫には菩薩の制捨することゝ眞実心なしという。これは(金)(親)本の特色か？

㉕ 凡夫には眞実心は具足することゝできぬという。これ本書の主張の中心と考えられる。

ハ釈テ云ク、相統シテ修を釈していはく、相恭敬礼拝称名讃歎憶念続して恭敬、礼拝、称觀察廻向發願シテ、心名、讃歎、憶念、觀察、廻々相統シテ余業ヲ以テ向發願して、心心相統キタシ不問故名ニ無間して余業をもてきたし修、又以ニ貪瞋煩惱ニ不ヘだてず、かるがゆへ來間ニ隨犯、隨懺シテ、に無間修となづく、又念ヲ隔テ時ヲヘタテ日貪瞋煩惱をもてきたしヲヘタテス、常ニ清淨ヘだてず、隨て犯せばナラシムルヲ、又無間隨懺して念をヘだて時修ト名ト云ヘリ、是モをヘだて、月をヘだて念仏余行ヲワカチテ釈セリ。	初釈ハ貪瞋等ライワはじめの釈は貪瞋等をス、余行ヲ以テキタシばいはず、余行をもてヘタテサル無間修也、きたしヘだてざる無間後釈ハ行ノ正雜ヲハイ修なり、後の釈は行のワス、貪瞋等ノ煩惱ヲ正雜おはいはず、貪瞋以テキタシヘタテサル等の煩惱をもてきたし無間修也、ヘだてざる無間修也、
---	--

シカノミナラス二行ノ 得失ヲ判シテ云ク、上 ノコトク念々相續シテ 命ヲワルヲ期トスル物 ハ十八即チ十カラ生シ 百ハ即百十カラ生ル、 何ヲ以テノ故ニ、	しかのみならず往生礼 讃の二行の得失を判し て、上のごとく念々相 續していのちおわるを 期とするものは、十は すなわち十ながらむま る、なにをもてのゆへ に、
仏ノ本願ト相応スルカ 故ニ、教ニ違セサルカ カ故ニ、若專ヲ捨テ、 雜業ヲ修スルモノハ百 ノ時ニマレニ一二ヲ 得、千ノ時ニマレニ三 五ヲ得、何ヲ以テノ故 ニ、雜縁乱動シテ正念 ヲ失カ故ニ、仏ノ本願 ト相応セサルカ故ニ、 教ト相違スルカ故ニ、 仏語ニ随ハサルカ故 ニ、係念相續セサルカ 故ニ、憶想間斷スルカ	仏の本願と相応するが ゆへに

<p>故ニ、廻願慙重真実ナ ラサルカ故ニ</p> <p>慙愧懺悔ノ心アルコト ナキカ故ニ等ヲ云ヘ リ。</p> <p>此中ニ貪瞋諸見ノ煩惱 キタリ間斷スルカ故ニ ト云ヘル等ハヒトリ雜 行ノ失ヲ出セリ、</p> <p>コ、ニ知ヌ、余行ニヲ ヒテハ貪瞋等ノ煩惱ヲ 發サスシテ行スヘシト 云事ヲ、</p> <p>是ニナスラエテ思ニ貪 瞋等ヲキラウ至誠心ハ 余行ニアリト見ヘタ リ、何ニ況廻向発願心 ノ積ハ水火ノ二河ノ喻 ヲ引テ愛欲瞋恚ノ水火 常ニウルヲシ常ニヤキ テヤムコトナケレトモ 深心ノ白道タルコト</p>	<p>慙愧懺悔の心あること あるがゆへに^㉔といへ り。</p> <p>この中に貪瞋諸見の煩 悩きたり間斷するがゆ へにといへるはひとり 雜行の失をいだせり。</p> <p>爰しりぬ、余行におい ては貪瞋等の煩惱をお こさずして行すべしと いふことを、</p> <p>これに順じてこれをお もふに、貪瞋等をきら ふ至誠心は余行にあり とみえたり、いかにい はむや廻向発願の積は 水火の二河のたとひを ひきて、愛欲瞋恚つね にやき、つねにうるほ して止事なけれども深</p>
---	--

㉔ 「懺悔の心あるこ
とあるがゆへに」
の文は懺悔の心あ
ることなきがゆへ
に」の写し誤りか。

㉕ 「余行の至誠心は
貪瞋を廃す」とい
うことか？

ナケレハ生ル、事ウト イヘリ。	信の白道たゆることな ければむまるゝことを うといへり。	次ニ深心ハ深信ノ心ナ リ、決定シテ深く自身 ハ現ニ是罪惡生死ノ凡 夫也、眩劫已來常ニ没 シ常ニ流転シテ出離ノ 縁アル事ナシト信シ、 決定シテ深く彼阿弥陀 仏ノ四十八願ヲ以テ衆 生ヲ摂受シ給フ、無レ疑 無レ慮 ^レ 彼ノ願力ニ乘レ ハ定テ往生スルコトヲ 得ト信ト云ヘリ、	初ニ先ツ罪惡生死ノ凡 夫眩劫ヨリ已來出離ノ 縁アル事ナシト信セヨ ト云ヘルは即斷善ノ闡 提ノ如キノ物ナリ、カ る、これすなわち斷善	信の白道たゆることな ければむまるゝことを うといへり。	次に深心は深信の心な り、決定してふかく自 身は現にこれ罪惡生死 の凡夫なり、眩劫より 已來常ニ流転シテ出離 の縁あることなしと信 じて出離の縁なしと信 じ、決定してふかくこ の阿弥陀仏の四十八願 をもて衆生を摂受した まふに、うたかひなく、 うらもゐなく、かの願 力に乘じて、さだめて 往生することと信 ずべしといへり。	深心はふかく信する心 なり、決定してふかく 自身は現にこれ罪惡生 死の凡夫なり、眩劫よ りこのかたつねに流転 して出離の縁なしと信 じ、決定してふかくこ の阿弥陀如来は四十八 願をもて衆生を摂取し 給ふ事うたかひなくお もんはかりなければか の願力に乘じてさだめ て往生する事と信 すべしといへり。	深心ハ深く信スル心ナ リ、決定シテ深く自身 ハ現ニ是レ罪惡生死ノ 凡夫也、眩劫ヨリ以來 常ニ流転シテ出離ノ縁 ナシト信シ、決定シテ 深く此ノ阿弥陀如来ハ じ、決定してふかくこ の阿弥陀如来四十八願 をもて衆生を摂取し給 フ事疑ナク、 慮 ^{オモヒ} ナケレハ彼願力 ニ乘シテ定テ往生スル 事ヲ得ト信スヘシト云 ヘリ。	始ニマツ罪惡生死ノ凡 夫眩劫ヨリ以來、出離 ノ縁アルコトナシト信 セヨト云ヘルハ、是則 と信せよといへるは、 斷善闡提ノ如クナル物 これすなはち、斷善闡	深心はふかく信する心 也、決定してふかく自 身は現にこれ罪惡生死 の凡夫なり、眩劫より 已來常ニ流転して出離 の縁なしと信 じて出離の縁なしと信 じ、決定してふかくこ の阿弥陀如来四十八願 をもて衆生を摂取し給 ふ事うたかひなくおも んばかりなければかの 願力に乘じてさだめて 往生する事と信 すべしといへり。
--------------------	------------------------------------	---	--	------------------------------------	---	--	---	--	---

<p>、ル衆生ノ一念十念ス レハ無始以來ノ生死輪 廻ヲ出テ、彼極樂世界 不退ノ国土ニ生ルト云 ニヨリテ信心ハ発ルヘ キナリ、</p>	<p>の闡提のごときものな り、かゝる衆生の一念 十念すれば無始より已 來生死輪廻をいで、 來生^{かた}死輪廻をいで、 極樂世界の不退の国土 に生ずといふによりて 信心はおこるべきな り。</p>	<p>のことなるもの也、 かゝる衆生の一念十念 すれば無始よりこのか た、いまだいてざる生 死の輪廻をいて、か の極樂世界の不退の国 土にむまるといふによ りて信心はおこるべき なり。</p>	<p>ナリ、カ、ル衆生ノ一 念十念スレハ無始ヨリ 以來イマタ出サル生死 ノ輪廻ヲ出テテ彼極樂 世界の不退ノ国土ニ生 ル^ト云ニヨリテ信心ハ 発ルヘキ也。</p>	<p>提のことなるもの 也。かゝる衆生の一念 十念すれば無始よりこ のかた、いまだいでざ る生死の輪廻をいで 、かの極樂世界の不 退の国土にむまるとい ふによりて、信心はお こるべきなり。</p>	<p>凡仏ノ別願不思議ハタ 、心ノカハル所ニアラ ス、唯仏与仏ノミヨク 知り給ヘリ、阿弥陀</p>	<p>仏の別願の不思議は、 たゞ心のはかるところ にあらず、たゞ仏と仏 とのみよくしりたまへ り。阿弥陀仏の名号を となふるによりて、五 逆十惡こと／＼くむま るといふ別願の不思議 力のまします、たれか、 これをうたがふべき や、善導の疏にいはい 或人なむだち衆生駄劫 よりこのかた、および 今生の身口意業に一切 かた、および今生の身</p>	<p>およそほとけの別願の 不思議はたゞ心のはか るところにあらず、仏 と仏とのみよくしり給 へり。阿弥陀仏の名号 となふるによりて五逆 十惡悉ク生ルト云フ 別願ノ不思議ノ力マシ マス、誰力はヲ疑ヘキ、 善導ノ疏ニ云ク、或ハ 人有テ汝衆生駄劫ヨリ 以來及ヒ今生ノ身口意 業ニ一切ノ凡聖ノ身ノ 上ニ於テ、具サニ十惡、 五逆、四重、謗法、闡提、 駄劫よりこのかたおよ</p>	<p>およそほとけの別願の 不思議は、これた心の はかるところにあらず、 唯仏と仏とのみよ くしり給ヘリ、阿弥陀 仏の名号をとなふるに よて、五逆十惡こと ／＼くむまるといふ別 願の不思議のちからま します、たれかこれを うたがふべき、善導の 疏にいはい、あるひは 人ありて、なんち衆生 駄劫よりこのかたおよ</p>	<p>◎浄土教の信心発起 について、信機信 法の二種深信によ つて信心はおこる という、罪惡生死 の凡夫を斷善根 (一闡提)という。 この考えは法然に 見られない、法然 は罪惡を主体的に とらえるが、本書 は客体として見て いる？</p>
--	---	--	--	--	---	---	---	--	---

<p>ヨク戴養シ、水ハヨク生潤シ、火ハヨク成壞スルカ如シ、如此等ノ事悉ク待対ノ法ト名ツク、即目ニ見ヘシ千差万別也。</p>	<p>く有をふうむ、地のよく載養^{さい}シ、水よく生潤シ、火よく成壞するがことし、かくのごときの事は、ことごとく待対の法となづく。すなわち目にみつへし、千差万別なり。</p>	<p>く有をふくむ、地よく載養^{さい}シ、みつよく生潤シ、火よく成壞するがことし、かくのごときら待対ノ法ト名ク。則自^{すな}見ルヘシ、千差万別ナリ。</p>	<p>何況ヤ仏法不思議ノ力、豈ニ種々ノ益ナカラシヤト云ヘリ、極樂世界ニ水鳥樹林ノ微妙ノ法ヲ轉モ不思議ナレトモ是ヲハ仏ノ願力ナレハト信シテ何ゾ只第十八ノ乃至十念ト云フ願ヲノミ可^疑哉。</p>	<p>いかにいはんや仏法不思議のちから、あに種々の益なからんやといヘリ、極樂世界に水鳥樹林の微妙の法をさやつヲ轉ルハ不思議ナレトモ是レ等ハ仏ノ願力ナレハト信シテ奈^{ナッ}只、第十八ノ乃至十念ト云フ願ノミ疑ヘキヤ。</p>	<p>いかにいはんや仏法不思議のちから、あに種々の益なからんやといヘリ、極樂世界に水鳥樹林の微妙の法をさやつるは不思議なれども、これらはほとけの願力なればと信じて、なんそたと第十八の乃至十念といふ願をのみうたがふべきや。</p>
<p>総シテ仏ノ説ヲ信ハ此モ仏説也、花嚴ノ三無差別、皓^{般若}ノ尽淨虚融、</p>	<p>すべて仏説と信せば、これも仏説なり、華嚴の三無差別、般若ノ尽淨虚融、</p>	<p>惣して仏説を信せば此も仏説なり、かの花嚴</p>	<p>たがふべきや、</p>	<p>かふべきや。</p>	<p>惣して仏説を信せば此も仏説なり、かの花嚴</p>

<p>法花ノ実相眞如、<small>(涅槃)</small>炎ノ悉有仏性タレカ不レ信、是モ仏説ナリ、彼モ仏説也、何ヲカ信シ何ヲカ信セサランヤ</p>	<p>淨虚融、法華の実相皆如、涅槃の悉有仏性たれか信ぜざらんや、これも仏説なり、かれも仏説なり、いづれおか信じ、いづれおか信ぜざらんや。</p>	<p>虚融法花の実相眞如、涅槃の悉有仏性たれか信ぜざらんや、これも仏説なり、かれも仏説なり、いづれをか信じ、いづれをか信ぜざらんや、</p>	<p>融、法華ノ実相眞如、涅槃ノ悉有仏性、誰レカ信セサラムヤ、是モ仏説ナリ、彼モ仏説ナリ、何レヲカ信シ、何レヲカ信セサランヤ、</p>	<p>淨虚融、法花の諸法実相、涅槃の悉有仏性たれか信ぜざらんや、これも仏説なり、これも仏説也、いづれをか信じ、いづれをか信ぜざらんや、</p>
<p>夫三字ノ名号ハ少シト云ヘトモ如来ノ所有ノ内証外用ノ功德、万徳恒沙ノ甚深ノ法門ヲ此ノ名号ノ中ニヲサマレル誰力是ヲ量ルヘキ、</p>	<p>これ三字の名号はすくなしといへども如来所有の内証外用の功德、万徳恒沙の甚深の法門をこの名号の中におさめたる、たれかこれをはかるべき、</p>	<p>それ三字の名号はすくなしといへとも如来所有の内証外用の功德万徳恒沙の甚深の法門をこのうちにおさめたり、たれかこれをはかるべきや。</p>	<p>三字ノ名号ハスクナシト云ヘトモ如来所有ノ内証外用ノ功德、万徳恒沙ノ甚深ノ法門ヲ此内ニ納メタリ、誰力是ヲ計ルヘキヤ。</p>	<p>それ三字の名号はすくなしといへとも、如来所有の内証外用の功德、万徳恒沙の甚深の法門をこのうちにおさめたり、たれかこれをはかるべきや。</p>
<p>疏ノ玄義分ニ此名号ヲ釈シテ云阿弥陀仏ト者是天竺ノ正音也、コ、ニハ翻シテ無量寿覺ト云、無量寿者是法、覺者は人也、人法ナラヒテアラハス故阿弥陀仏ト云、人法者所觀ノ境</p>	<p>疏の玄義分にこの名号を釈してはいはく、阿弥陀仏といふはこれ天竺の正音、ここには翻して無量寿覺という。無量寿といふは、これ法なり、覺といふはこれ人なり、人法ならびに</p>	<p>疏の玄義分にこの名号を釈してはいはく、阿弥陀仏といはこれ天竺の正音、こゝには翻して無量寿覺といふ、无量云フ、無量寿ト云ハ是此ニ翻シテ無量寿覺ト云ハは無量寿覺といふ、無量云フ、覺ト云ハ是人、人法ナラヘテアラハス</p>	<p>疏ノ玄義分ニ此名号ヲ釈シテ云ク、阿弥陀仏ト云ハ是天竺ノ正音、此ニ翻シテ無量寿覺ト云ハは無量寿ト云ハは無量寿覺ト云ハは無量寿覺といふ、無量云フ、覺ト云ハ是人、人法ナラヘテアラハス</p>	<p>疏の玄義分にこの名号を釈してはいはく、阿弥陀仏といはこれ天竺の正音、こゝには翻して無量寿覺といふ、無量云フ、覺ト云ハ是人、人法ならびに</p>

生ノ義八万四千ノ法門	言には阿字本不生の義	真言には阿字本不生の	真言には阿字本不生の
四十二字ノ阿字ヨリ出	八万四千の法門阿字よ	義四十二字を出生せ	義四十二字を出生せ
生セリ、一切ノ法ハ阿	り出生せり、一切の法	は阿字を離タル事ナキカ	り、一切の法は阿字を
字ヲハナレタル事ナシ	は阿字をはなれたるこ	えに功徳甚深の名号と	はなれたる事なきかゆ
故ニ功徳甚深ノ名号ナ	となし、かるがゆへに	功徳甚深の名号と	ト云ヘリ、天台宗ニハ
リト云ヘリ、天台ニハ	功徳甚深の名号なりと	いへり、天台宗には空	へに功徳甚深の名号と
空仮中ノ三諦、性了縁	いへり、天台には空仮	仮中の三諦、正了縁の	いへり、天台宗には空
ノ三義、法報応ノ三身	中の三諦、正了縁の三	三義、法報応の三身、如	仮中の三諦、正了縁の
如来所有ノ功徳、是ヲ	法義、法報応の三身如	来所有の功徳これをい	ノ三義、法報応ノ三身、
イテス、故ニ功徳甚深	来なり、所有の功徳莫	てさるゆえに功徳莫大	如来所有ノ功徳、是ヲ
也、ト云、	大なりといふ。	なりといへり。	出サルカ故ニ、功徳莫
如レ是諸宗各我カ存ル	かくのごとく諸宗おの	かくのごとく諸宗にお	大ナリト云ヘリ。
所ノ法ニツヒテ阿弥陀	のくわが存ずるところ	のくわが存ずるところ	如レ是諸宗各各ノ我存
ノ三字ヲ釈セリ、今此	の法につきて阿弥陀の	ろの法について阿弥陀	スル所ノ法ニ付テ阿弥
宗ノ心ハ真言ノ阿字本	三字を釈せり、いまこ	の三字を釈せり。いま	陀ノ三字ヲ釈セリ、今
不生ノ義モ、天台ノ三	の宗のこころは真言の	この宗の心は真言の阿	マ此宗ノ心ハ真言ノ阿
諦一理ノ法モ、三論ノ	阿字本不生の義おも、	字本不生の義も、天台	字本不生ノ義モ、天台
八不中道ノ旨モ、法相	天台の三諦一理の法	の三諦一理の法も、三	この宗の意は真言の阿
ノ五重唯識ノ心モ、惣	も、三論の八不中道の	論の八不中道のむね	字本不生の義も、天台
テ森羅ノ万法広ク是ニ	むねも、法相の五重唯	も、法相の五重唯識の	の三諦一理の法も、三
構習フ、極樂世界ニ漏	識のこころも、すべて	心も惣して森羅の万法	法相の五重唯識の意
タル法門ナキカ故也。	一切の万法ひろくこれ	ひろくこれを撰すとな	も、惣して森羅の万法
		極樂世界ニ漏タル法門	ひろくこれを撰すとな

⑤元版には「八万四千法門」の文なし。
 ⑥親本に「四十二字」の文なし。

<p>但シ今弥陀ノ願意ハ如シ是サトレトニハアラス、唯タ深く信心ヲ至テ唱ル者ヲ迎ムトナリ、普婆扁鵲カ万病ヲイヤス藥ハ万草諸藥ヲ以テ合藥セリト云ヘトモ病者是ヲサトリテ其ノ藥種何分、其ノ藥草何両和合セ^ルヲ不^レ知然而トモ是ヲ服スルニ万病悉クイユルカ如シ。</p>	<p>におきむとならふ、極樂世界にもれたる法門なきがゆへなり。</p>
<p>たゞしいたく弥陀の願のころはかくのごとくさとこれにはあらす、たゞふかく信心をいたしてとなふるものをむかへむと也、普婆扁鵲が万病をいやす藥は万草諸藥をもて合藥せりといへどもその藥草なぶん和合せりとしらねども、これを服するに万病のごとくいゆるがごとし。</p>	<p>らふ、極樂世界にもれたる法門なきがゆへに、</p>
<p>たゞしいま弥陀の願の心はかくのごとくさとるにはあらす、たゞふかく信心をいたしてとなふるものをむかえんとなり、普婆扁鵲が万病をいやすくすりはもろくすりをもて合藥せりといへども病者これをさとりてその藥種何分その藥草何両和合せりとしらす、しかれどもこれを服するに万病のごとくいゆるかことし。</p>	<p>唯シ今マ弥陀ノ願ノ心ハ如シ是悟レト云フニハ非ス、但深く信心ヲ至シテ唱ル物ヲ迎ヘムトナリ、普婆扁鵲カ万病ヲイヤス藥ハモロくノ草、ヨロツノ藥ヲ以テ合藥セリト云ヘトモ病者是ヲ覺^サリテ其ノ藥種何分、其ノ藥草何両和合セリト知ラス、然レトモ是ヲ服スルニ万病悉クイユルカ如シ。</p>
<p>但ウラムラクハ此藥ヲ信セスシテ、我病ハ極テ重シ、イカ、此藥リニテハ療^ユル事アラント</p>	<p>たゞしいま弥陀本願の意はかくのごとくさとこれにはあらす、たゞふかく信心をいたしてとなふるものをむかへんとなり、普婆扁鵲が万病をいやすくすりはもろくノ木、よろずの草をもて合藥せりといへども病者これをさとりてその藥木何分その藥草何両和合せりとしらず、しかれども是を服するに万病のごとくいゆるかことし。</p>
<p>但シ恨ムラクハ此藥ヲ信セスシテ我病ハ極メテ重シ、何力此藥ニテ愈ル事アラムト疑テ服シ、いかゞ此藥にてい</p>	<p>たゞしうらむらくはこのくすりを信ぜずして、我病はきわめておもて、わかやまひはきはめておもし、いかゞこの藥</p>

セスハ著婆カ薬術モ扁鵲秘方モ空クシテ其益アルヘカラ ^ス サル事ヲ、	わゆることあらむとうたがひて服せずば、著婆が医術も扁鵲が秘方も、むなしくてその益あるべからざることを。	のくすりにてはいゆる事あらんとうたかひて服せずば、著婆が医術も扁鵲が秘方も、むなしくてその益あるべからざることを。	疑テ、服セスンハ著婆カ医術モ、扁鵲カ秘方モ空クシテ其益アルヘカラサルカ如ク、	にてはいゆる事あらんとうたかひて服せずんは著婆が医術も、扁鵲の秘方もむなしくその益あるべからざるがごとく、
弥陀ノ名号モ又 ^レ 如 ^レ 此我 ^レ 煩惱惡業ノ病ハ極テ重シ、イカ、此ノ名号ヲ唱テ生ル事アラムト疑テ、是ヲ信セスハ弥陀ノ誓願モ釈尊ノ所説モムナシクシテ、其驗アルヘカラサルモノカ、	弥陀の名号もかくのごとし、わが煩惱惡業のやまひきわめておもし、いかゞこの名号をとなへてむまるゝことあらんとうたがひてこれを信ぜずば、弥陀の誓願、釈尊の所説もむなしくして、驗あるべからざるものか。	弥陀の名号もかくのごとし、それ煩惱惡業のやまひきわめておもし、いかゞこの名号をとなへてむまるゝ事あ疑テ是ヲ信セスハ弥陀ノ誓願、釈尊ノ所説モムナシクシテ、其ノシルシ有ヘカラス。	弥陀ノ名号モ如 ^レ 是夫煩惱惡業ノ病極テ重シ、イカ、此名号ヲ唱ヘテ生ル、事アラントとなへてむまるゝこと	弥陀の名号もかくのごとし、それ煩惱惡業のやまひきはめておもし、いかゞこの名号をとなへてむまるゝこと
唯仰テ信スヘシ、良薬ヲ得テ服セスシテ死スル事ナカレ、崑崙山ニ行テ玉ヲ不 ^レ 取シテ返リ、旃檀林ニ入テ枝ヲ不 ^レ 折シテ出テナハ後	たゞあふいで信すべし、良薬をもて服せずして死する事なかれ、崑崙の山にゆきて玉をとらずしてかへり、旃檀まをとなすしてかえテ枝ヲ攀 ^ル スシテ出テナリ、旃檀のはやしにい	只仰テ信スヘシ、良薬ヲ得テ服セスシテ死スル事ナカレ、崑崙ノ山ニ行テ、珠ヲ取ラスシレ、崑崙の山にゆきて玉をとらずしてかへり、旃檀のはやしにい	只仰テ信スヘシ、良薬ヲ得テ服セスシテ死スル事ナカレ、崑崙ノ山ニ行テ、珠ヲ取ラスシレ、崑崙の山にゆきて玉をとらずしてかへり、旃檀のはやしにい	たゞあふきて信すべし、良薬をえて服さずして死することなかれ、崑崙の山にゆきて玉をとらずしてかへり、旃檀のはやしにい

悔如何セム自ラヨク思量スヘシ。	ずしていてなむ、後悔いかゞせむ、みづからよく思量すべし。	りて枝をおらすしていなば後悔いかくせん、みづからよく思量すへし。	ハ後悔イカ、セム、自りて、枝をよぢすしていでは後悔いかゞせん、みづからよく思量すへし。	抑我等駄劫ヨリ己来タ仏ノ出世ニモ遇ケム、并ノ化道ニモ値ケム、過去ノ諸仏モ現在ノ如来モ皆是宿世ノ父母也、多生ノ朋友也、カレハイカニシテ我等ハ証シ給ヘルソ、我等ハ何ニヨリテ生死ニト、マレルソ、慙々シ、
抑我等駄劫ヨリ己来タ仏ノ出世ニモ遇ケム、并ノ化道ニモ値ケム、過去ノ諸仏モ現在ノ如来モ皆是宿世ノ父母也、多生ノ朋友也、カレハイカニシテ我等ハ証シ給ヘルソ、我等ハ何ニヨリテ生死ニト、マレルソ、慙々シ、	そもゝゝ我等駄劫よりこのかた仏の出世にもあひけん、菩薩の化導にもあひけん、過去の諸仏も現在の如来もみなこれ宿世の父母なり、多生の朋友なり、これにいかにしてか菩提を証したまへるぞ、われらはなにゝよきて生死にとまれるぞ、はづべしゝ。	そもゝゝわれら駄劫よりこのかた仏の出世にもあひけん、菩薩の化導にもあひけん、過去の諸仏も現在の如来もみなこれ宿世の父母なり、多生の朋友なり、かれはいかにして菩提を証し給へるぞ、われはなにゝよきて生死にはとまれるぞ、はづべしゝ、かなしむへし。	抑我等駄劫ヨリ己来タ仏ノ出世ニモ値ケム、菩薩ノ化導ニモ遇ケム、過去ノ諸仏モ現在ノ如来モ皆是レ宿世ノ父母也、多生ノ朋友也、彼みなこれ宿世の父母也、多生の朋友なり、しかるにかれはすてに菩提を証し給へるに、われはなにゝよきて生死にはとまれるぞと、はづへしはづへし、かなしむへし、かなしむへし。	而ヲ本師尺迦如来大罪ノ山ニ入、邪見林ニカクシテ、三業放逸ニ六情マタカラサラン衆生
而ヲ本師尺迦如来大罪ノ山ニ入、邪見林ニカクシテ、三業放逸ニ六情マタカラサラン衆生	しかるに本師釈迦如来大罪の山にいり、邪見の林にかくれて、三業放逸に六情またからざ	本師釈迦如来の大罪のやまにいりて、邪見のはやしにかくれて三業放逸に六情全からさら	本師釈迦如来ノ大罪ノ山ニ入リ、邪見ノ林ニ隠レテ三業放逸ニ六情全カラサラム衆生ヲ、	業放逸に六情縦蕩なら

ヲ我國土ニハ取置テ教化度脱セシメムト誓ヒ給ヘリ□	らむ衆生をわかくに、とりおきて教化度脱せしめむとちかひたまひたりしかば、 そもくゝいかにしてかゝる諸仏のこしらへかねたまへる衆生」の文あり。 〔元〕版にはなし。 「諸仏の難化の衆生」という意なり。
抑何ニシテカ、ル諸仏ノコシラヘカネ給ヘル衆生ヲハ度脱セシメムトハ誓ヒ給ヘルソト尋ヌレハ阿弥陀如来因位ノ時、無靜念王ト申セシ時 ⁽⁵⁶⁾ 并心ヲ発テ生死ヲ過度セシメムト誓給ヒシニ尺迦如来ハ宝海梵士ト申シキ、	抑何ニシテカ、ル衆生ヲハ度脱セシメムト誓ヒ給フソト尋ハ阿弥陀如来因位ノ時無上念王ト申テ菩提心ヲ発シ生死ヲ過度セシメント誓ヒ給ヒシニ、釈迦如来ハ宝海梵志ト申シテ、 國をもくらいをもすてゝ撰取衆生の願をおこし給ひしに
無靜念王 ⁽⁵⁷⁾ 國位ヲステ并心ヲ発シ撰取衆生ノ願ヲ立テ我仏ニ成ンム時、十方三世ノ諸仏モコシラヘカネ給タラム惡業深重ノ衆生ナリ	我國ニハ取置テ教化度脱セシメント誓ヒ給ヒタリシハ、 抑何ニシテカ、ル衆生ヲハ度脱セシメムト誓ヒ給フソト尋ハ阿弥陀如来因位ノ時無上念王ト申テ菩提心ヲ発シ生死ヲ過度セシメント誓ヒ給ヒシニ、釈迦如来ハ其時宝海梵志と申て、無靜念王の
らむ衆生をわかくに、とりおきて教化度脱せしめんとちかひ給ひたりしは、 そもくゝいかにしてかゝる衆生をは度脱せしめんとちかひ給ふそとたづぬれば、阿弥陀如来因位の時無上念王と申して菩提心をおこし生死を過度せしめむとちかひ給ひしに、釈迦如来は宝海梵志と申し、 無上念王くにのくらゐをすて、菩提心ヲ発シ撰取衆生願ヲ発シ給ヒシ時ニ	我國ニハ取置テ教化度脱セシメント誓ヒ給ヒタリシハ、 抑何ニシテカ、ル衆生ヲハ度脱セシメムト誓ヒ給フソト尋ハ阿弥陀如来因位ノ時無上念王ト申テ菩提心ヲ発シ生死ヲ過度セシメント誓ヒ給ヒシニ、釈迦如来ハ其時宝海梵志と申て、無靜念王の
無淨念王菩提心をおこし撰取衆生の願をたてゝわれ仏になれらむとし給ひし時に、	無淨念王菩提心をおこし撰取衆生の願をたてゝわれ仏になれらむとし給ひし時に、
に、釈迦如来は宝海梵士とまふしき、	に、釈迦如来は宝海梵士とまふしき、
無淨念王菩提心をおこし撰取衆生の願をたてゝわれ仏になれらむとし給ひし時に、	無淨念王菩提心をおこし撰取衆生の願をたてゝわれ仏になれらむとし給ひし時に、
に、釈迦如来は宝海梵士とまふしき、	に、釈迦如来は宝海梵士とまふしき、
に、釈迦如来は宝海梵士とまふしき、	に、釈迦如来は宝海梵士とまふしき、

(57)〔金〕本には「諸仏のこしらえかねたまへる衆生」の文あり。

〔元〕版にはなし。
「諸仏の難化の衆生」という意なり。

「衆生を度脱せしめんと」他動詞の用法を用う。「衆生を度脱する」は自動詞の表現か？

(56)〔金〕本「生死を過度せしめん」とあって、衆生の過度をいうか、他動詞に表現す。
菩薩道ならは自動詞「過度せん」ととすべきか？

(57)「釈迦如来は宝海梵志云云」の文は後に記す。文章に前後あり、「正」版にて文意の通ずるよう改訂したか？

<p>トモ我名ヲ唱へハ皆悉ク迎ムト誓給ヒシヲ宝海梵士聞畢テ我必穢惡ノ国土ニシテ正覺ヲ唱テ惡業深重ニシテ輪廻无際ナラム衆生等ニ此事ヲ示シ、衆生是ヲ聞テ唱へハ生死ヲ解脱セム事甚タ易スカルヘシトヲ^⑧ホシテ此願ヲ発シ給へり。</p>	<p>駄劫ヨリ已來タ諸仏ノ世ニ出テ縁ニ随ヒ機ヲハカリテ各衆生ヲ度脱セシメ給ウ事カス塵沙ニスキタリ、或ハ大乘ヲ説キ小乗ヲ説キ或ハ実教ヲヒロメ權教ヲヒロム機縁純熟スレハ</p>
<p>りとも我名をとなへばみなこと／＼くむかへむとちかひたまひしを^⑨宝海梵志きゝおはりてわれかならず穢惡の国土にして正覺をとなへて、惡業深重輪転無際の衆生等にこのことをしめさむ、衆生これをきゝてとなへば生死を解脱せむこと、はなはだやすかるべしとおぼしめして、この願をおこしたまへり。</p>	<p>駄劫よりこのかた諸仏よにいひて、縁にしたがひ機をはかりて、おの／＼群萌を化したまふこと、かず塵沙にすぎたり、あるいは大乘をととき小乗をととき、或は実教をひろめ權教を</p>
<p>この宝海梵志も願をおこしてわれかならず穢惡の土にして正覺をなりて惡業の衆生を</p>	<p>引導せんとちかひ給ひて、この願をおこし給ふ也。</p>
<p>此宝海梵志も願ヲ発シテ、我レ必ス穢土ニシテ正覺ヲ成テ惡業ノ衆生ヲ</p>	<p>引導セント誓ヒ給ヒテ此願ヲ発シ給也。</p>
<p>臣下なりしが同じく菩提心をおこしてわれかならず穢土にして正覺をなりて惡業の衆生を</p>	<p>引導せんとちかひ給ひて、この願をおこし給へる也。</p>
<p>⑧ 無淨念王の攝取衆生の願は「三世諸仏のこしこへかねたる衆生」の称名往生を誓うという。称名本願は「惡人往生の願」とする。釈迦は「これを称揚し衆生に聞かしめて」称えしめるという。</p>	<p>⑨ この願とは宝海梵志の願であつて、四十八願全部を説くことか？ また第十七願に説く諸仏稱揚の願意をいうか、尺迦が阿弥陀仏のことを説かんとする願か？</p>

皆悉ク其ノ益ヲ得。

ひろむ、機縁純熟すればみなことごとくその益をう。

む、有縁の機はみなことごとくその益をう。

愛ニ釈尊八相ヲ五濁惡世ニ唱テ放逸□邪見ノ衆生ノ出離其期ナキコトヲ哀テ、此ヨリ西方ニ極樂世界アリ、仏マシマス、阿弥陀ト名ケタテマツル、彼ノ仏ハ乃至十念若不生者不取正覺ト誓給テ、已ニ仏ニ成リ給ヘリ、速ニ□
レヲ念セヨ、出離生死ノ道多ト云ヘトモ惡業煩惱ノ衆生ノトク生死ヲ解脱スヘキコトコレニ過タル事ナシト教給ヒテ努々是ヲ疑事ナカレ。

こゝに釈尊八相成道を五濁惡世となへて放逸邪見の衆生の出離、その期なきことをあはれみて、これより西方にて、これよりにしに極樂世界あり、仏まします、阿弥陀となつてまつる、このほとけ乃至十念若不生者不取正覺とちかひ給ひ、すて、仏になり給へり、すみやかに念せよ、出離生死の道おほしといえども惡業煩惱の衆生のとく生死を解生のとく生死をはなる教テ、努々疑事ナカレ、

愛ニ釈尊八相成道ヲ五濁惡世ニ唱ヘテ、放逸邪見ノ衆生ノ出離其期ナキヲ哀テ、此レヨリ西ニ極樂世界アリ、仏マシマス、阿弥陀ト名ケ奉ル、此仏ハ乃至十念若不生者不取正覺ト誓ヒ給ヒテ仏ニ成リ給ヘリ、速ニ念セヨ、出離生死ノ道多シト云ヘトモ惡業煩惱ノ衆生ノ疾死ヲ離ル、事此業煩惱の衆生のとく生死をはなる事この門にすぎたるはなしとおしへてゆめくうたかふ事なかれ。

<p>六方恒沙ノ諸仏モ皆同 証誠シ給ヘルナリ、 ネンコロニ教給テ我モ シ久ク穢土ニアラハ邪 見放逸ノ衆生我ヲソシ リ我ヲソムキテ、カヘ リテ惡趣ニ墮セン、我 世ニ出ル事ハ本意唯タ 弥陀ノ名号ヲ衆生ニ 令聞タメナリトテ阿 難尊者ニムカヒテ汝好 ク此事ヲ持テ廻代ニ流 通セヨトネムコロニ 約束シオキテ跋提河ノ ホトリ沙羅木ノ本ニ テ八十ノ春ノ天、二月 十五ノ夜半ニ頭北面西 ニシテ涅槃ニ入り給ヒ キ、</p>	<p>六方恒沙ノ諸仏もみな おなじく証誠したまへ るなりと、ねむごろに おしへたまひて、われ もひさしく穢土にあら ば邪見放逸の衆生われ をそしり、我をそむき て、かへりて惡趣にお ちなむ、われよにいづ ることは本意たゞこの ことを衆生にきかしめ るがためなりとて阿難 尊者にむかひて、汝よ くこのことをとおきよ に流通せよとねむごろ にやくそくしおきて、 跋提河のほとり、沙羅 林のもとにて八十の春 の天、二月十五の夜半 に頭北面西にして涅槃 にいらたまひにき。</p>	<p>六方恒沙の諸仏も証誠 し給ふなりとねんころ におしへ給ひて、われ もしひさしく穢土にあ らば邪見放逸の衆生わ れをそしり、われをそ むきて、かへりて惡道 におちなん、濁世にい てたる事ハ本意たゞこ の事を衆生にきかしめ んかためなりとて、阿 難尊者になんちよくこ の事を廻代に流通せよ とねんころに約束しお きて、跋提河のほとり 沙羅林のもとにして、 八十の春の天、二月十 五日の夜半に頭北面西 にして滅度に入給ひ き。</p>	<p>六方恒沙ノ諸仏モ証誠 シ給フナリト 惡ニ教 シ給テ、我レ若シ久ク 穢土ニアラハ邪見放逸 ノ衆生我レヲ謗我レヲ 背テ返テ惡道ニ墮ナ ン、濁世ニ出タル事ハ 本意唯此事ヲ衆生ニ聞 シメンカ為ナリトテ、 阿難尊者ニ汝好ク此事 ヲ廻代ニ流通セヨトネ ンコロニ約束シ置テ、 跋提河ノ辺沙羅林ノモ トニシテ八十ノ春ノ 天、二月十五ノ夜半ニ 頭北面西ニシテ滅度ニ 入り給ヒキ。</p>	<p>六方恒沙の諸仏も証誠 し給ふなりと、ねんこ ろにをしへ給ひて、わ れもしひさしく穢土に あらは邪見放逸の衆生 われをそしり、われを そむきてかへりて惡道 におちなん。濁世にい てたる事は本意たゞこ の事を衆生にきかしめ んかためなりとて、阿 難尊者になんちよくこ の事を廻代に流通せよ とねんころに約束しを きて跋提河のほとり沙 羅林のもとにして八十 の春の天、二月十五の 夜半に頭北面西にして 滅度に入給ひき。</p>
<p>其ノ時ニ日月光ヲ失</p>	<p>そのとき日月ひかりを</p>	<p>その時に日月ひかりを</p>	<p>其時ニ日月光ヲ失ナ</p>	<p>その時に日月ひかりを</p>

ヒ、草木色ヲ変シテ竜 神八部禽獸鳥類ニイタ ルマテ天ニ仰テナケ キ、地ニ臥テ叫フ□ニ 阿難目連等ノ諸大弟子 悲涙ノナミタヲ抑テ相 議シテ云ハク、我等尺 尊ノ恩ニナレタマツ リ八十ノ春秋ヲ送り迎 ヘシ間、或ハ我等尺尊 ニ奉レ問答給モアリキ、 或ハ自ラネンコロニ告 給事モアリキ、而ニ化 縁爰ニ尽テ黄金ノ膚忽 ニカクレ給ヒヌ、	うしなる、草木色を變 じ、竜神八部禽獸鳥類 にいたるまで、天にあ ふきてなき、地にふし てさけふ、阿難目連等 の諸大弟子、悲涙のな みだをおさへて、相議 していはく、われら釈 尊の恩になれたてまつ りて八十年の春秋をお くり、化縁こゝにつき て黄金のはたえたちま ちにかくれたまひぬ、 あるいは我等釈尊にと ひたてまつるに、こた えたまふこともあり き、あるいは釈尊みづ からつげたまふことも ありき、	うしなひ草木いろを變 し竜神八部禽獸鳥類に いたるまで天にあふき てなき、地にふしてさ けふ、阿難目連等のも ろゝの大弟子等悲泣 のなみたをおさへてあ ひ議していはく、釈尊 の恩になれたてまつり て八十の春秋をおくり き、化縁こゝにつきて 黄金のはたえたちまち にへたゞり給ひぬ、あ るいはわれら世尊に問 たてまつるに答へ給へ る事もありき、あるい は釈尊みづから告給ふ 事もありき。	ヒ、草木色ヲ変シ、竜 神八部禽獸類ニ至ルマ テ、天ニアフキテナゲ キ、地ニフシテサケフ、 阿難目連等ノ諸ノ大弟 子等悲泣ノ涙ヲ抑ヘテ 相議シテ云ク、釈尊ノ 恩ニ馴レ奉リテ八十ノ 春秋ヲ送りキ、化縁コ ノニツキテ黄金ノ膚 頓ニ隔リ給ヒヌ、或ハ 我等世尊ニ向ヒ奉ルニ 答給フ事モアリ、或ハ 釈尊自告給フ事モアリ キ、	うしなひ、草木いろを 変し、竜神八部禽獸鳥 類にいたるまで、天に あふきてなき、地にふ してさけふ、阿難目連 等のもろゝの大弟子 等悲泣のなみたをおさ へてあひ議していは く、釈尊の恩になれた てまつりてそこはくの 春秋をおくりき、化縁 こゝにつきて黄金のは たへたちまちにへたゞ り給ひぬ、あるひはわ れら世尊に向たてまつ るに答へ給へる事もあ り、あるひは釈尊みづ から告給ふ事もあり き。
---	---	---	--	---

④〔金〕本と他の四本
はこの個処は文章
が前後している。

シ置テ未來ニモ伝ヘ御 カタミトモセント云テ 多羅葉ヲ拾ヒテ悉ク是 ヲ注シ置キ三藏タチ是 ヲ訳テ晨旦ニ渡シ、本 朝ニ伝フ、諸宗ニ各ツ カサルトコロノ一代 聖教是也。	すべからく如来の御こ とばをしるしおきて、 未來にもつたへ、御か たみにもせむといひ て、多羅葉をひろいて こと／＼くこれをして しおきて、三藏達これ を訳して振旦にわた し、本朝につたへ、諸宗 につかさざるところの 一大聖教これなり。	からく如来の御ことは をしるしおきて未來に もつたへ御かたみとも せんといひて、多羅葉 をひろいてこと／＼く これをしるしおきしを 三藏たちこれを訳して 唐土へわたし、本朝へ つたへ給ふ、諸宗につ かさざるところの一代 聖教これ也。	記シ置テ、未來ニモ伝 ヘ、御形見トモセント 云テ、多羅葉ヲ拾ヒテ 悉ク是ヲ注置キ、三 藏タチ、コレヲ訳シテ 唐土へ渡シ、本朝へ伝 ヘ給フ、諸宗ニツカサ トル所ノ一代聖教是レ ナリ。	からく如来の御ことは をしるしおきて、未來 にもつたへ御かたみと せんといひて、多羅 葉をひろひてこと／＼ く是をしるしおきし を、三藏たちこれを訳 して唐土にひろめ、本 朝へつたへたまふ。諸 宗に学するところの一 代聖教これ也。
而ヲ阿弥陀如来善導和 尚ナノリテ唐土ニ出テ 云ハク、 如来出現於五濁、 隨宜方便化群萌、 或說多聞而得度、 或說少解証三明、 或教福惠雙除障、 或教禪念坐思量、 種種法門皆解脫、 無過念仏往西方、	しかるを阿弥陀如来、 善導和尚となりて、唐 土にいでのたまはく 如来出現於五濁 隨宜方便化群萌 或說多聞而得度 或說少解証三明 或教福惠雙除障 或教禪念坐思量 種種法門皆解脫 無過念仏往西方	しかるに阿弥陀如来善 導和尚となりて唐土 にいて、 如来出現於五濁 隨宜方便化群萌 或說多聞而得度 或說少解証三明 或教福惠雙除障 或教禪念坐思量 種種法門皆解脫 無過念仏往西方	然ニ阿弥陀如来善導和 尚トナノリ唐土ニ出テ テ、 如来出現於五濁 隨宜方便化群萌 或說多聞而得度 或說少解証三明 或教福惠雙除障 或教禪念坐思量 種種法門皆解脫 無過念仏往西方	しかるに阿弥陀如来善 導和尚となりて唐土 にいて、 如来出現於五濁 隨宜方便化群萌 或說多聞而得度 或說少解証三明 或教福惠雙除障 或教禪念坐思量 種種法門皆解脫 無過念仏往西方

上尽一形至十念、 三念五念仏来迎、 直為弥陀弘誓重、 致使凡夫念即生、 トヲセラレテ尺尊出世 ノ本懷唯此事ニ有ト云 ヘシ。	上尽一形至十念 三念五念仏来迎 直為弥陀弘誓重 致使凡夫念即生 釈尊の出世の本懷たゞ このことにありといふ べし。	上尽一形至十念 三念五念仏来迎 直為弥陀弘誓重 致使凡夫念即生 との給へり、釈尊出世 本懷、但此事ニ有リト 云フヘシ。	上尽 ^ニ 一形 ^ヲ 至 ^リ 十念 ^ニ 三念五念仏来迎 ^{シタリ} 直為 ^ニ 弥陀弘誓重 ^{キカ} 致使 ^ニ 凡夫念即生 ^{ハセ} ト宣へり、釈尊出世ノ 本懷、但此事ニ有リト 云フヘシ。	上尽 ^ニ 一形 ^ヲ 至 ^リ 十念 ^ニ 三念五念仏来迎 直為 ^ニ 弥陀弘誓重 ^{キカ} 致使 ^ニ 凡夫念即生 ^{ハセ} との給へり、釈尊出世 本懷たゞこの事にあり といふへし。	自信教人信 難中転更難 大悲伝普化 真成報仏恩 ト云へり、釈尊ノ恩ヲ 報ス、是誰力為ソヤ、 偏ニ我等カタメニアラ スヤ、今度空クシテ過 ナハ出離何ノ時ヲ ^カ 期セムトスル、速ニ信 心ヲ発シテ生死ヲ過度 スヘシ、	自信教人信 難中転更難 大悲伝普化 真成報仏恩 といへり、釈尊の恩を 報ずる、これたれがた めそや、ひとへに我等 がためにあらずや、こ のたびむなしくてすぎ きなば出離いつれの時 を期せんとする、す みやかに信心をおこし て生死を過度すべし。	自信教 ^{シテ} 人 ^ヲ 信 ^{セシムルコト} 難中 ^{キニウタガハシ} 転更難 ^ニ 大悲 ^ス 伝 ^フ 普化 ^ス 真成 ^ニ 報 ^ス 仏恩 ^ニ トイヘハ、釈尊ノ恩ヲ 報スルハ是誰力為ソ ヤ、偏 ^{ヒトヘ} ニ我等力為ニ非 ヤ、此度空ク過キナハ 出離何レノ時ヲカ期セ ムトスル、速ニ信心ヲ 発シテ生死ヲ過度スヘ シ。	自信教 ^{シテ} 人 ^ヲ 信 ^{セシムルコト} 難中 ^{キニウタガハシ} 転更難 ^ニ 大悲 ^ス 伝 ^フ 普化 ^ス 真成 ^ニ 報 ^ス 仏恩 ^ニ といへは釈尊の恩を報 ずるも、また唯この念 仏にありというへし、 もし此 ^⑧ たひむなしくす きなば出離いつれの時 を期せんとする、す みやかに信心をおこし て生死を過度すべし。	⑧(金)〔親〕本、〔元〕 版には送り点、送 り仮名なし、〔寛〕 版にはこれを付 す。 〔正〕版は横に訓読 をつける、今訓読 みを略す。 ⑨(正)版には横線の見 処に文の改変が見 られる。
---	---	---	---	---	---	---	---	---	---

トニ具シヤスキ事也、	とに具しやすきことな	人ことに具しつべき事	人ことに具しつべき事
国土ノ快樂ヲ聞テ誰カ	り国土の快樂をきゝ	なり、国土ノ快樂をき	なり、国土の快樂をき
願ハサランヤ、抑彼国	たれかねがはざらむ	聞テ誰カ願ハザラム	ゝたれかねかはさら
土ニ九品ノ差別アリ、	や、そもかのくに、九	んや、そも／＼かの国	んや、そも／＼かの国
我等何レノ品ヲカ期ス	品の差別あり、われら	土に九品の差別あり、	土に九品の差別あり、
ヘキ、善導和尚ノ御心	いづれの品おか期すべ	われらいづれの品をか	われらいづれの品をか
ハ極樂弥陀ハ報仏報土	き、善導和尚の御こゝ	期すへき、善導和尚の	期すへき、善導和尚の
也、未斷惑ノ凡夫ハ惣	ろに極樂の弥陀は報仏	御心は極樂弥陀は報仏	御意は極樂は是報土、
シテ生スヘカラスト云	報土なり、未斷惑の凡	報土也、未斷惑の凡夫	◎〔正〕版は報仏報土
ヘトモ弥陀ノ別願ノ不	夫すべてむまるべから	すへてむまるへからす	◎〔正〕版は報仏報土
思議ニテ罪惡生死ノ凡	ずといへども弥陀の別	陀ノ別願不思議ニテ罪	◎〔正〕版は報仏報土
夫一念十念シテ生スト	願の不思議にて罪惡生	惡生死ノ凡夫一念十念	◎〔正〕版は報仏報土
釈シ給ヘリ。	死の凡夫の一念十念し	シテ生ルト釈シ給ヘ	◎〔正〕版は報仏報土
	てむまると釈したまへ	まると釈し給ヘリ。	◎〔正〕版は報仏報土
	り。	り。	◎〔正〕版は報仏報土
而ヲ上古ヨリ已来多下	しかるに上古よりこの	然ルヲ上古ヨリ以来多	しかるに上古よりこの
品ト云トモ可足ナン	かた、おほくは下品と	かたおほく下品といふ	かたおほく下品といふ
ト云テ上中品ヲ欣ハ	いふともたぬむべしな	とも足ぬへしといひ	とも足ぬへしといひ
ス、是ハ惡業ノ重ニ恐	むといひて、上品をね	て、上品をねかはす、	て、上品をねかはす、
テ心ヲ上品ニカケサル	がはず、これは惡業の	これは惡業のおもきを	これは惡業のおもきを
ナリ、若夫レ惡業ヨラ	おもきにおそれて心を	おそれて心を上品にか	おそれて心を上品にか
ハ惣シテ往生スヘカラ	上品にかけざるなり、	けさる也、もしそれ惡	けさる也、もしそれ惡

◎浄土に九品の差別を説く。
法然の意にあら

◎〔正〕版は報仏報土を分けて説く。

ス、願力ニヨリテ生セリ、何ソ上品ニス、マム事ヲ望ミカタシトセムヤ、	もしそれ悪業によらばすべて往生すべからず、願力によりてむまれば、なんぞ上品にすゝまむことをのぞみがたしとせむや。	業によらは惣して往生すへからず、願力によレハ奈 ^{ナン} 上品ニ進マン事ヲ難シトセム。	業によらは惣して往生すへからず、願力によてむまればなんそ上品にすゝまん事をかたしとせん。
惣テ弥陀ノ浄土ヲ儲給事ハ願力ノ成就スル故也、然ラハ又念仏ノ衆生ノ正クハ生スヘキ国土也、乃至十念若生者不取正覚ト立給ヒ此願ニヨリテ感得シ給ヘル所ノ国土ナルカ故ナリ、	惣しては弥陀浄土をまうけ給事は願力の成就するゆえなり、しかれは又念仏衆生のむまる衆生ノ生ルヘキ国土ナヘキくになり、乃至十念若生者不取正覚とたて給ひてこの願によテ感得シ給ふところなるかゆえなり、	惣シテハ弥陀浄土ヲ儲給フ事ハ願力ノ成就スル故也、然レハ又念仏衆生ノ生ルヘキ国土ナヘキくになり、乃至十念若生者不取正覚ト建給ヒテ此願ニ依テ感得シ給フ処	それ弥陀浄土をもうけ給事は願力の成就するゆへなり、しかれはこれ念仏の衆生のむまるへきくになり、乃至十念若生者不取正覚とたて給ひて、此願によテ感得シ給ふところなるかゆへなり。
今又観經ノ九品ノ業ヲイワハ下品ハ五逆十惡ノ罪人、命終ノ時ニ臨ミテハシメテ善知識ノ勸ニヨリテ或ハ十声或	いま又観經の九品の業をいはは下品は五逆十惡の罪人、命終の時惡の罪人、臨終の時にのぞみて、はじめて善知識のすゝめにより	今又観經ノ九品ノ業云ハ、下品ハ五逆十惡ノ罪人臨終ノ時、始テ善知識ノ勸ニ依テ或	今此観經九品の業をいはは下品は五逆十惡の罪人臨終の時、はしめて善知識のすゝめにより

ハ一声称念シテ生事ヲ エタリ、我等惡業フカ シト云ヘトモ未 ^レ 造 ^ニ 五 逆 ^ヲ 行業疎ソカナリト モ念仏一声十声ニ過タ リ、臨終ヨリ前ニ弥陀 誓願ヲ聞得テ随分ニ信 心ヲ至タス。	て、或は十声あるいは るいは一声称念してむ まるゝ事をえたり、わ れら罪業おもしといへ とも五逆をはつくら す、行業おろかなりと いへとも一声十声にす きたり、臨終よりさき 聞得テ、随分ニ信心ヲ 至ス。	テ生ル、事ヲ得タリ、 我等罪業重シト云ヘト モ五逆ヲハ作ラス、行 るにわれら罪業おもし といへとも五逆をはつ くらす、行業をろそか なりといへとも一声十 声にすぎたり、臨終よ りさきに弥陀の誓願を 聞得テ随分に信心をい たす。	然ハ下品マテハタタル ヘカラス、中品ハ小乗 乗の持戒の行者教養仁 義礼智信等ノ世善ノ行 人也、是又中々生レカ タシ、小乗ノ行人ニア ラス、持タル戒モナシ、 我等力分ニアラス、	しかれば下品までくだ るへからず、中品は小 乗の持戒の行者孝養仁 義礼智信等の行人なり、 この品には中々に 品ニハ中々生レ難シ、 小乗ノ行人ニモアラ ス、持タル戒モナケレ ハ我等力分ニ非ス。	ひは一声称念してむま るゝ事をえたり、しか るにわれら罪業おもし といへとも五逆をはつ くらす、行業をろそか なりといへとも一声十 声にすぎたり、臨終よ りさきに弥陀の誓願を 聞得テ随分に信心をい たす。	上品ハ大乘ノ凡夫菩提 心等ノ行也、并 ^{（菩提）} 心ハ 上品は大乘の凡夫菩提 心等の行なり、菩提心 等ノ行なり、菩提心ハ	上品は大乘の凡夫菩提 心等の行なり、菩提心 等ノ行なり、菩提心ハ	上品は大乘の凡夫菩提 心等の行なり、菩提心 等ノ行なり、菩提心ハ	上品は大乘の凡夫菩提 心等の行なり、菩提心 等ノ行なり、菩提心ハ
--	--	---	--	---	---	--	--	--	--

⑩「罪業おもしとい
えども五逆をつく
らず云云」は法語に
なきか、「下品の
人間ではないとい
う」これ一考を要
す。

臨終に至る前に本
願を聞法し、信心
をおこす、平生聞
法による信心をあ
かす。

<p>諸宗各ノ得意云トモ 淨土宗ノ心ハ淨土ニ生 レント願スヲ并心ト 云ヘリ、念仏ハ是大乘 行也、無上功德也、然 ハ上品往生ヲヒクヘ カラス。</p>	<p>心は諸宗おの／＼ふか くこゝろえたりといへ ども、淨土宗のこゝろ は淨土にむまれむと願 ずるを菩提心といへ り、念仏はこれ大乘の 行なり、無上の功德也、 しかれば上品の往生て をひくべからず。</p>	<p>は諸宗おの／＼心えた りといふ、淨土宗の心 は淨土にむまれんとね かふを菩提心といふ、 念仏これ大乘の行な り、無上功德なり、し かれは上品往生は手 ひくへからず。</p>	<p>諸宗各各心得タリト云 フ、淨土宗ノ心ハ淨土 ニ生レムト願フヲ菩提 心ト云フ、念仏是レ大 乗ノ行也、無上功德也、 然レハ上品往生ハ手ヲ 引ヘカラス、</p>	<p>は諸宗おの／＼其意え 同しからず、淨土宗の 意は淨土にむまれんと ねかふを菩提心とい ふ、又念仏はすなはち これ大乘の行なり、無 上功德なり、しかれば 上品往生は手をひくべ からず。</p>	<p>又本願ニ乃至十念ト立 給ヒテ、臨終現前ノ願 ニ大衆圍繞シテ其人ノ 前ニ現セムト立給ヘ リ、中品ハ声聞衆來迎 シ、下品ハ化仏ノ三尊 或ハ金蓮台等來迎スト 云ヘリ、</p>	<p>又本願に乃至十念とた てたまひて、臨終現前 の願に大衆圍繞してそ の人のまへに現ぜむと たてたまへり、中品は 化仏の三尊、あるいは 金蓮華等來迎すといへ り。</p>	<p>又本願に乃至十念とた て給ひて、臨終現前の 願に大衆と圍繞せられ てその人のまへに現せ んとたて給へり、中品 は声聞衆の來迎下品は 化仏の三尊あるいは金 蓮華等の來迎なり。</p>	<p>又本願ニ乃至十念ト立 給テ臨終現前ノ願ニ大 衆ト圍繞セラレテ、其 人前ニ現セント立給ヘ リ、中品ハ声聞衆ノ來 迎、下品ハ化仏ノ三尊 聲聞衆の來迎、下品は 化仏の三尊、あるいは 金蓮花等の來迎なり。</p>	<p>然ラ大衆ト圍繞シテ現 しかるに大衆に圍繞セ られて現せんとたて給 へる本願の意趣は上品 來迎をまうけ給ヘ リ、なんぞあなかに</p>	<p>④「親ノ本には「声聞 來迎す」の文字を 脱すか？」</p>
--	---	---	--	--	---	--	---	---	---	--

②淨土願生心を菩提
心と釈し、念仏は
大乘行という、選
択集にはこのこと
なし、一考を要す。

③上品往生を願生す
べしという、これ
一考を要す。

<p>尺尊ノ所説ヲ疑ハ六方恒沙ノ諸仏ノ所説ヲ疑也、即此ハ大千ニヘ給ヘル舌相ヲヤフリタ、ラカスナリ、</p>	<p>うたがふなり、釈尊の所説をうたがふは六方の諸仏の所説をうたがふなり、これ大千のべたまへる舌相にのべりたゞらかすなり。</p>	<p>かふなり。釈尊の所説をうたがふは六方恒沙の諸仏の所説をうたがふなり、すなはちこれを壊爛する也。</p>	<p>バ六方恒沙ノ諸仏ノ所説ヲ疑也、則チ是レ大千ニ舒ヘ給ヘル舌相ヲ壊爛スル也、</p>	<p>かふなり、釈尊の所説をうたがふは六方恒沙の諸仏の所説をうたがふなり、すなはち是大千のへ給へる舌相を壊爛する也。</p>	<p>若又是ヲ信ハ弥陀ノ本願ヲ信ルノミニアラバ、尺迦ノ所説ヲ信スルナリ、尺迦ノ所説ヲ信ハ六方恒沙ノ諸仏ノ所説ヲ信ル也、一切諸仏ヲ信スレハ一切法ヲ信ルニナル、一切ノ法ヲ信レハ一切ノ并ヲ信スルニナル、此信ヒロクシテ廣大ノ信心也、</p>	<p>もしまたこれを信ずればたゞ弥陀の本願を信ずるのみにあらず、釈迦の所説を信ずるなり、釈迦の所説を信ずるは六方恒沙の諸仏の所説を信ずるなり、一切の諸仏を信ずれば一切の諸法を信ずるなり、この信ひろくして廣大の信心也、</p>	<p>もし又これを信せはたゞ弥陀の本願を信ずるのみにあらず、釈尊の所説を信ずるなり、釈尊の所説を信ずるは六方恒沙の所説を信ずる也、一切の諸仏を信ずるは一切の法を信ずるは一切の法を信ずるになる、一切の法を信ずるは一切の菩薩を信ずるになる、この信ひろくして廣大の信心なり。</p>	<p>若シ又是ヲ信セハ只弥陀ノ本願ヲ信スルノミニ非ス、釈尊ノ所説ヲ信スルナリ、釈尊ノ所説ヲ信スルハ六方恒沙ノ諸仏ノ所説ヲ信スルナリ、一切ノ諸仏ヲ信スルハ一切ノ法ヲ信スルニナル、一切ノ法ヲ信スルハ一切ノ菩薩ヲ信スルニナル、此信廣クシテ廣大ノ信心ナリ。</p>	<p>もし又是を信せはたゞ弥陀の本願を信ずるのみにあらず、釈尊の所説を信ずるなり、釈尊の所説を信ずるは六方恒沙の諸仏の所説を信ずる也、一切の諸仏を信ずるは一切の法を信ずるは一切の法を信ずるになる、一切の法を信ずるは一切の菩薩を信ずるになる、これすなはち一切の三寶を信ずるなり、この信ひろくして廣大の信心なり。</p>	<p>善導和尚ノ云ク、</p>	<p>善導和尚のいはく、</p>
---	---	--	---	--	--	--	--	--	--	-----------------	------------------

④(親)本には「一切の法を信ずる」云々の文はなし。

為斷凡夫疑見執
 皆舒舌相覆三千
 共証七日称名号
 又表尺迦言說真
 六方如來舒舌証
 專称名号至西方
 到彼華開聞妙法
 十地願行自然彰
 心々念仏莫生疑
 六方如來証不虛
 三業專心无雜乱
 百宝蓮華応時現
 法事讚云、
 人天善惡
 皆得往生
 到彼无殊
 齊同不退
 他方凡聖
 亦願往來
 到彼无殊
 齊同不退

南无阿弥陀仏

為斷凡夫疑見執
 皆舒舌相覆三千
 共証七日称名号
 又表尺迦言說真
 六方如來舒舌証
 專称名号至西方
 到彼華開聞妙法
 十地願行自然彰
 心々念仏莫生疑
 六方如來証不虛
 三業專心无雜乱
 百宝蓮華応時現文

為斷凡夫疑見執
 皆舒舌相覆三千
 共証七日称名号
 又表尺迦言說真
 六方如來舒舌証
 專称名号至西方
 到彼華開聞妙法
 十地願行自然彰
 心々念仏莫生疑
 六方如來証不虛
 三業專心无雜乱
 百宝蓮華応時現文

為斷凡夫疑見執
 皆舒舌相覆三千
 共証七日称名号
 又表尺迦言說真
 六方如來舒舌証
 專称名号至西方
 到彼華開聞妙法
 十地願行自然彰
 心々念仏莫生疑
 六方如來証不虛
 三業專心无雜乱
 百宝蓮華応時現文

⑦(正)版には右に訓
 読みを付すが、今
 は略す。

⑧この「言說真」まで
 の文には訓読みを
 付す、以下の文は
 音読みのみ。

三部經大意	源空撰	建長六年甲寅五月十五日	於平針鄉新善光寺書之
		正嘉二歲戊午八月十八日書寫之	